

心

有所權

冊號

長校學業商瀕橫  
生先進澤美  
序

# 人賣商

生先郎太源田富  
著

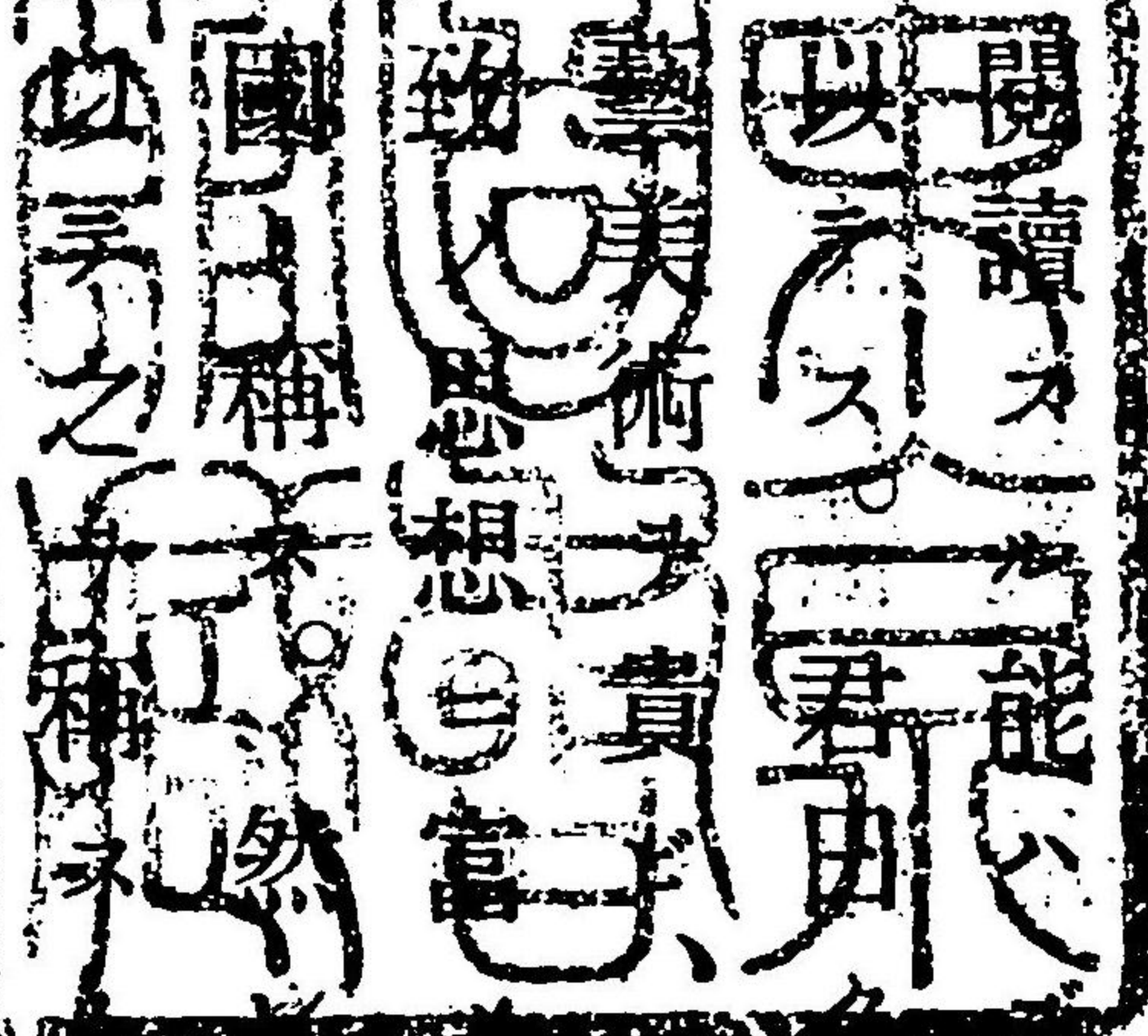
行發屋書堂文成京東



№12704

「商賣人」ノ序。

商界ノ壯士富田源太郎君、頃者其編スル所之「商賣人」ヲ携ヘ來リ、余ニ序ヲ請フ。余時ニ眼ヲ憂ヒ、之ヲ



因テ君ニ問フニ其之編纂ノ大意ヲ、近來歐米諸邦ノ人、概テ我國ノ工、我國ノ山水明媚ヲ愛シ、我國人民風ルヲ喜ビ、以テ世界第一優美閑雅ノモト、唯憾ムラクハ、未ダ曾テ富強ヲモソアラサルヲ。故ニ余ハ更ニ進テ富強ノ實ヲ講ジ、以テ世界第一優美閑雅富強盛ノ一帝國タラシメシト欲ス。而シテ唯之ヲ然ラシムル所以ノモノ必ラズ先ツ商業ヲ隆盛ナラシメサル可





95 料  
40510

カラズ。商業ヲ隆盛ナラシムルモ、必ズ先ヅ完全ナル商業世界ノ少年壯士ヲ薰陶養成セザル可カラズ。此書ノ主意、即チ是ニ在リト。余之ヲ聞キ、思ハズ案ヲ拍テ曰ク、是レ實ニ余ガ多年ノ宿望ナリ。余乏ヲ横濱商業學校々長ニ承ケ、商家子弟ノ教育ニ任ズルコト、既ニ七年ソ久キニ亘ル。其間完全ナル養成法ヲ設ケント欲シ、廣ク内外ノ巨商豪賈ニ接シ、詳ニ其風俗習慣ヲ察スルニ、我ノ彼ニ及バザル所以ノモノハ、商業上最モ必用ナル一性質ノ缺乏ニ由ルガ如シ。一性質ノ缺乏トハ何ゾヤ。他ナシ、信用ナルモノ是ナリ。蓋シ信用ハ商業ノ精神ニシテ、其須臾モ欠ク可カラザルコト言ヲ待タズ。而シテ具サニ其本元ヲ尋ヌ

レバ、唯二箇ノ原素アルノミ、曰クパンクチュアリテ  
一、曰クエキザクト子ス是ナリ。パンクチュアリテ  
トハ事ヲ爲スノ時ヲ嚴格ニ守リ、毫モ之ヲ錯ラザル  
ノ謂ナリ。エキザクト子ストハ事ヲ爲スノ順序方法  
ヲ綿密ニ履行シ、毫モ之レニ違ハザルノ謂ナリ。今  
我商人ノ外人ニ信用ヲ得ル能ハザルモノハ、職トシ  
テ此ノ二原素ノ缺乏ニ因ラザルハナシ。故ニ余ハ商  
家ノ子弟ヲ教育スルニ、嚴格ニ時ヲ守リ、綿密ニ順  
序方法ヲ履行スルノ風俗習慣ヲ以テセリ。今君商賣  
人ヲ編成シ、我國少年壯士ノ商業ニ志ス者ニ教フル  
ニ、完全無缺ノ商人タル資格ヲ以テセント欲ス。冀  
クハ、君其レ余ガ卑見ヲ採リ、之ヲ卷末ニ加ヘ、以



テ完全ナル商界ノ壯士ヲ養成スルノ一助ニセラレシ  
 コトヲト。談終ハレバ、則チ談話ノ筆記、既ニ君ノ手  
 ニ成ル。君曰ク、是レ以テ序トナスベシト。乃チ之  
 チ卷首ニ弁ズ。時ニ明治廿一年十月廿五日ナリ。

美澤進口述。

商賣人自序。

余は近來の世變ヲ察シ、此國を圍繞せる諸般の事物  
 ヲ考へて、今後の日本は、商賣人の日本たるべきを  
 斷信シ、商賣人の日本たるべき時運の伏する處に、  
 新鮮なる商賣人を生ずる自然の勢あるを認め、己れ  
 自から始め、其勢中ニ在るものなるを信ぜるものな  
 り。而して商賣人の新たなる面目は、今の書生の漸  
 くニ商ニ歸入して、其力を此ニ盡その時より始まる  
 べきを信ず。余の敢て自から揣らず、此「商賣人」を著  
 せるに至りしも、此固信を抱いて止まざるが爲めに  
 して、新たなる商となりぬべき人々ニ向つて深く望  
 む所のものあればなり。其人々の大任を負ふて、身



二  
の處じ方の彼の如くなるを見ては、自から省み、又其人々に向つて、戒じむる所なきを得ざるなり。西國金満家の富を致せし所以を問窮して、深く慕はじき所れものあるは會へば、已れ自から之を期し、又同ト日本の新商人となりぬべき人々に向つて、之を學はんを勧めざるを得ざるなり。漫言ひ徒に勸むるを好まされ共、余が見聞の知覺は余を驅つて、此に至らしむるを如何せん。商賣人は即ち其一氣の呵成して、咄嗟の間は生せしものなれば、素より不備不完前後錯雜せる所あるを辭せず。讀者乞ふ此意を了して之を咎むる所なく、余の望む所の言、余の勸むる所の説は於て考ふる所あらは、余の幸のみに

あらざるなり。余は謹んで之を世間幾多の青年士人が机上の燈下に呈出して、敢て其一顧を求むるものあり。

戊子中夏七月金港釣鐘新田の閑居に於て、

錢塘居士筆。



# 商賣人。

## 目次

序。

### 第壹章。

日本の富を如何せん。

日本は世界の遊苑として終るべきにあらず。

日本の富は日本人民の希望を満さず。

日本の後來は拜金拜錢の時世あり。

### 第二章。

日本前途の商賣人。

日本後來の致富策は世界の市場と市場との仲次業を占すに在り。

日本は商國の天利を有す。

大日本國の甚だ小なるを如何せん。

世界の江州商人たるとは目下の商人に望むべからず。

商人社會に改良を來すの事情。



商人は學者を招き、學者は商界に行く。  
新らしき江州商人。

第三章。商人の學問。

書生の商に歸するの道行。

普通教育。

手書を善くすべし。

手書を讀むとに熟すべし。

算術の能。

簿記學。

外國語の能。

商用書式、商用熟語、商用書簡の習讀。

速記法。

商業地理、及商業史の知識。

經濟學。

商法律。

第四章。壯年士人に寄語せんとする所のものあり。

商人の徳行。

徳行上の責任。

私を制するの習慣を養ふべし。

費エをして儲ケに超へしむべからず。

借り。……現金主義。

掛買の不利。

借金。

外見を飾るの不利。

服粧論。

身を潔くせよ、身と飾るべからず。



燕雀之子を以て甘んずべからず。

成功と美人。

第五章。 學者の歸商及其實行。

學者の歸商に伴ふの流弊。

商となるの望を抱き商界に歸身せば。學者の氣風を去つて商人根情を持つべし。

學者の樂と商人の樂。

必かも商人とならざれば一片の月給取りを免かれず。

第六章。 泰西商賣人が富を致し、富を積むの道。

金満家の致富策に奇も亦く妙もなし。

リカリーの致富策。

中世のヤイルドの言行。

店賣商人のナボレナン。

巨富は才の働らきに成らずして奉る志の功に成る。

英國新聞記者の言。

致富の事は天然の技能にあらず。

不才子の却つて富と成す所以は何ぞや。

節儉の樂。

節儉ある二人の法學士。

節儉家の樂は金を積むの樂あり。

破産の統計。

金を浪費すれば鰐魚に吞まる。

ブラッセイの致富策……生費の區域を小にし商賣の區域を大にす。

隱居仕事に農事を營む……散すべきに多金を散す。

アギソンの名言。



金持ちの史家。  
金満家の心事甚はだ密あり。……仁恵と金儲ケとを同時に  
す。

世俗の未だ發見せず、空しく埋没しかる大利を發掘したる魯  
國の一長者。

アストルの立身。

ハーバー成業の活經歷。

紐育ヘラルドの創設者ベンチットの事業。

觀世物師のバルナム。

バルナムの節約。

紐育の商王ステウアートの大安賣。

第七章。讀者に告別の辭。

錢の事は重んぜざるべからず。

錢の事を大切にするは、兩様の道より、國の富昌を來すの力  
となる。

致富の術は、簡あり、平あり。

万事を其事を爲すに充てたる時間に仕遂ぐべし。

大功を我に持來すものは何ぞや。

周密ある心事の日本人とあれ。

バルナム成業の規則十ヶ條。

第一。事業の撰擇。附て書生歸商の事に關して。……第

二。約束を破るべからず。……第三。万事に全力を注ぐ

べし。……第四。飲酒を戒しむ。……第五。架空の望

を屬すべからず。……第六。力を散すべからず。……

第七。適任の人を用ひよ。……第八。廣告の事。……

米國新聞を其儘抄録。……新聞廣告の利益ある一例。……



……第九。奢侈を避くべし。……一時速成の偽紳士を氣取るべからず。……第十。他に依頼すべからず。……

妻を娶れとの勸告。

何物をも失はず、何事をも忘れず。

敢て其如くあるを務めよ。

著述の次第。

「商賈人」は平を語る者あり。

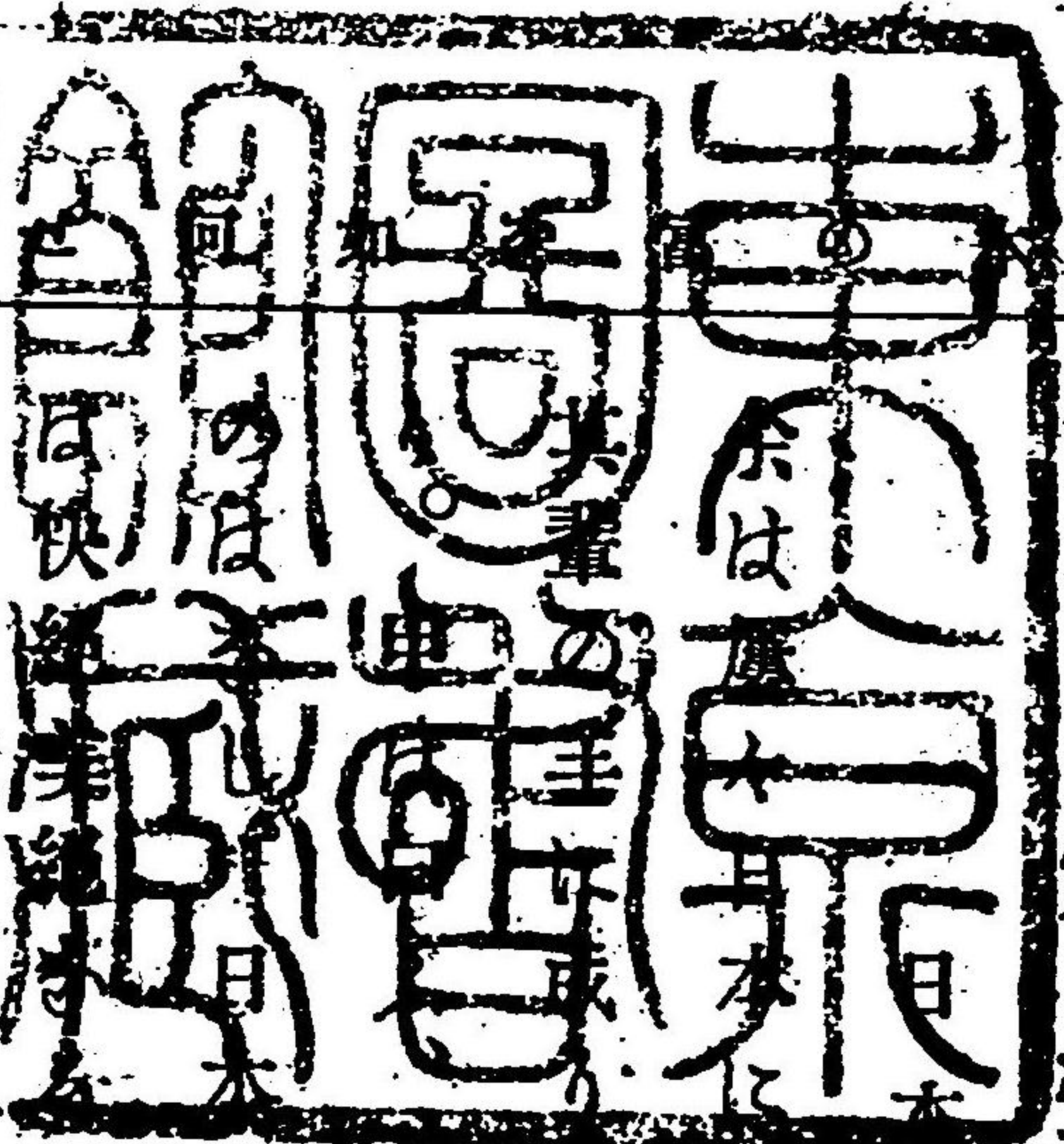
目録終

# 「商賈人」

富田源太郎 著

## 第一章

日本の富を如何せん。



其書の主眼は、日本に來遊せし外國の旅客が日本を評するの言を聞き、又し日本の周遊記を周讀して轉た長大息をなすものな日本程美しくし邦土はあし、日本の山川程快よきも日本の名勝舊跡程樂しきものはあしと。乙は曰ふ、日本の世界の名勝舊跡程樂しきものはあしと。丙の著書は富岳の壯觀、琵琶湖の絶景、日光の美術、伊勢音頭の優美を賞賛して已まず。之を要するに彼に聽き此に問ふも日本を以て一の快活佳美ある邦ありとあして之を賞賛し之を愛敬するは一なり。然れ



ば日本小ありと雖も既に海外人の眼を拭ふの風光山河に富み、美術歌舞に富み、全世界中の一極樂國あり、外客の遊苑ありとの評あるものあれば、我々日本人の分として喜ぶべきに似たりと雖も、余は獨り此言を聞いて長大息に堪へざるものあり。余は固より日本の美觀に富める國たるを悦ばざるにはあらずと雖も、外客の眼中只だ日本的好風月あつて曾つて他の事般あきは豈歎すべきの至りにあらずや。嗚呼我日本は一箇の遊苑にして終るべきか。晉に富峯の美、琵琶湖の勝を誇つて止むべきか。此に止まるとを得ば敢て羨やむものもなく悲むともなく、世間甚だ無事たるべしとはいへ、我々日本人の希望は此を以て満足すべからざるあり。平素常に云はずや、大日本帝國と。然らば則ち日本帝國の光輝は唯だ天然の美景、區々の美術より現はすべきにあらざるなり。東海の一隅、一箇の富める帝國を

立て、富の力を以て日本の國脈を維持し、日本の權勢を張り、又其名聞を立てざるべからず。日本に來遊せる英國の遊子をして日本は東海の英國たるの實ありと評せしむるに至つて、我々日本人の希望は始めて満足するを得べきのみ。然らば則ち美術の日本を變じて商賣の日本とせよ、花の帝國を變つて富の帝國とせよ、我國前途の事はまた此に外あらざるあり。余常に思へらく、日本現在の富及び後來日本の國土より生すべきの富は、當代日本人の希望を満足するの力ありと。我々日本人の一部は既に眼を開き西國の開化文明を見て、之を望まんとせり。之を望むと同時に之を實行せんと期せり。かく我々日本人の希望、甚だ高く甚はだ廣しと雖も、西國の開化文明は蓋し多錢を以て買ひたるものあり。然らば則ち西國の文化を日本の國土に見んとするものは、ま



た之を買ふの多錢あくば能はず。借問す、日本の國裡果して之を買ひ得るの富源ありや否や。七百万圓の製茶を二倍するも一千四百万圓に過ぎず、二千万圓の蠶糸を三倍するも六千万圓に過ぎず。高カの知れたる日本國裡の富を以ては到底西國の開化文明を致すに足らざるあり。今日に於て未だ太はだしき不足を感せざるものは、日本一部の人士の間に斯希望あるに過ぎざるが爲めあり。少數ある政治家、講者、學者、先覺者の希望は、糸茶の富、以て之を満たすを得んとはいへ、他日日本全般の人民が、事および勢に従ひ、蝸牛角頭、眼を轉じて西洋万里開化文明の氣紛々たるを見て大に之を望むの時、是即ち富の不足を感ずるの時あり。富を求むるの手段と計畫するの時なり。眠りに就ける日本多數の人民が臥床より出るの時ありとせば、また我富源の少きを憂ふるの時あらざるべきを得んや。

商人の富源は、茶と蠶糸に在り。今日に於ては、茶の富は、蠶糸の富に比し、遠く劣る。故に、茶の富を倍し、蠶糸の富を三倍するに過ぎず。高カの知れたる日本國裡の富を以ては、到底西國の開化文明を致すに足らざるあり。今日に於て未だ太はだしき不足を感せざるものは、日本一部の人士の間に、斯希望あるに過ぎざるが爲めあり。少數ある政治家、講者、學者、先覺者の希望は、糸茶の富、以て之を満たすを得んとはいへ、他日日本全般の人民が、事および勢に従ひ、蝸牛角頭、眼を轉じて西洋万里開化文明の氣紛々たるを見て大に之を望むの時、是即ち富の不足を感ずるの時あり。富を求むるの手段と計畫するの時なり。眠りに就ける日本多數の人民が臥床より出るの時ありとせば、また我富源の少きを憂ふるの時あらざるべきを得んや。

若し不幸にして

日本人民は遂に眠りきりにして

若し不幸にして日本人民は遂に眠りきりにして終らば、日本は蠶糸の國あり茶葉の郷ありとて、獨り自から安んずるを得べしとはいへ、斯くの如きは以て我日本人民に望むべきにあらざるあり。眠つて醒めずんば、鼓を鳴らし鐘を撞て之を覺ましませざるべからず。また一方よりいへば日本と圍繞する万般の事物は、日本當代の民をして終に長眠を破らしむるの時あるべし。然らば則ち日本の前途は富を求むるも急あるの前途たるべし、其後來は拜錢 拜金の時世たるべし。

我々當代の人民は日本が東洋の英國たらんとを望んで英民の富なきものあり。高く飛ばんとを欲して飛ぶの翼なきものなり。之を如何せんとするか、之を如何せんとするか。

商人の富源は、茶と蠶糸に在り。今日に於ては、茶の富は、蠶糸の富に比し、遠く劣る。故に、茶の富を倍し、蠶糸の富を三倍するに過ぎず。高カの知れたる日本國裡の富を以ては、到底西國の開化文明を致すに足らざるあり。今日に於て未だ太はだしき不足を感せざるものは、日本一部の人士の間に、斯希望あるに過ぎざるが爲めあり。少數ある政治家、講者、學者、先覺者の希望は、糸茶の富、以て之を満たすを得んとはいへ、他日日本全般の人民が、事および勢に従ひ、蝸牛角頭、眼を轉じて西洋万里開化文明の氣紛々たるを見て大に之を望むの時、是即ち富の不足を感ずるの時あり。富を求むるの手段と計畫するの時なり。眠りに就ける日本多數の人民が臥床より出るの時ありとせば、また我富源の少きを憂ふるの時あらざるべきを得んや。



日本前途の商賣人

第二章

日本前途の商賣人

論トて此に至りて、余は日本將來の事は英國國民の爲せる所を學ぶの外ありと斷信、斷言するものあり。英吉利が蕞爾たる一小國を以て字内に雄視する所以のものは、他國他州の富を汲收するの結果にあらずや。試るみに今の英國より其屬邦を去り、其海外貿易を去らば、餘に残るもの果して何物かある。邦土小あり、富源限あり、此に於てか水を渡り山を超へ東西南北利のある所を周遍して、通商貿易の業を経したるものが、是れ今日の英國の富を醸生したるものにあらずや。願ふに豆の如き日本國裡に於て、如何に殖産勸農の事業を

日本前途の商賣人

起したればとて、其産出力は高カの知れたるものあり。固より殖産勸農の業を振作するは、望まざるにあらずと雖も、余は之を以て日本後事の一事として、尙ほ他に富昌を求むるの計を策せざるべからず。即ち大にしては英民が爲したる如く、蘭人が爲したるが如く、小にしては我江州商人が爲したるが如く、我物産を以て彼物産に換へ、又更らに之を別國異郷に販賣して、世界に散滿せる市場と市場との仲次業を爲すにあり、畧言せば世界の江州商人とあるにあり。

若し夫れ日本天賦自然の地形、地勢之を行ふに不向きありせば、余また口を開かざるあり。然れ共地圖を開ひて我日本の位置形勢を見るに及んでは、進んで此般を以て我士人に告げざるを得ざるなり。環海千里纜と繋ぐべきの港、碇と下すべきの灣、沿岸に星羅し、土



地小にして人口多し。東に富昌を以て世界に鳴るの北米合衆國を向かへ、西に人口多き支那と接し、南に建國の新なる濠州新西蘭に面し、北に魯領ウラオストツクを有す。遠く往けば歐洲諸國あり。尙ほ進んで新販路を求むれば、印度、爪哇、暹羅、呂宋、布哇、加奈太、墨西哥あり、南米諸國あり、北米合衆國大西洋海岸あり。實に東亞の英吉利たるものあるにあらずや。然るに尙ほ今日の如くにして止むは、即ち天賦の妙利を棄つるものにあらずして何ぞや。好んで富を迎へざるものにあらずして何ぞや。日本人は人後に立たんとを厭ふものあり。人の前に出でんを好むものあり。平素常に言はずや、大日本帝國と。去りながら輿地の圖を開き、日本の邦土が甚はだ細かきを見て、心私かに「大日本帝國の套語に耽づるものなきにあらず。此に於てか、他に我大を誇る所の

ものを求めて、小日本の却つて、大日本たる所以を示すを望んで已まざるに至らんとす。然らば則ち我日本の邦土が最小最微なるは、他日我日本の民生をして最大最盛の事業を就さしむる所以にあらずや。朝日に香ふ山櫻は、以て我日本と誇るに足らず。然るを退守不進、以て今日に安んずるは、當代人民の怠として見るべきものあり。」然りと雖も世界の江州商人たるべしとの事は、目下に言ふべくして行ふべからざるの事あり。將來を待つて行へるべきの事あり。蓋し當時の商人社會に於て其事局に當り、之に幹旋すべき氣力と智力とを有する者なきが爲めあり。多年來商を卑しんとたるの結果は、氣力あり智力ある人を驅つて他の門に入らしめ、官途の高貴にして多給あるはよく其人を吸収して、濟々たる多士に充つる今日の政府と現せり。故に氣力智力あるものは大抵は政府に入り、商の野には其



人あきが爲めに、政治の業は維新以來今に至るまで進歩甚はだ速やかなりしに引きかへ、商賣の事は幾んど三十年前の昔と同じく、曾つて差せる進歩も亦く、世の進潮に伴ふはざるの嫌あり。去れば今の如くに商人をさし措きて、之に向つて世界の江州商人たるべしと勸むるも、到底行なはるべからざるを見る。

去りながら此商人社會も永久今の如くには止まらざるあり。近來に於て商を尙ぶの風は漸やくに起らんとするに、官海もまた人に充ちたるの觀あるは、是れ他日我商人社會の一改良を與ふるの原たるべし。著者嘗つて或る雜誌中に記るして曰く、

(前畧)日本第二の維新とは何ぞや。其意味を説明かさざる前に、時人をして之を釋せしめば、或ひは言はん二十三年の曉に開關來會つてあき國會の新事に會して、上下共に動くを云ふと。思ふに世

間二十三年の時機を以て、日本第二の維新と心得るものも少からざるとあらんと雖も、余の所謂第二の維新とは、別に尙ほ大なるものあるを認めて之を云ふものあり。明治初年の維新は世を動かすと固より大からざりしにあらず。上下地を轉ト、富貴處を變へたる等、之を要するに日本革命の一として數ふべきものありと雖も、其變動の手は、單に政治の一局部に入りたるに過ぎず。

世間少數ある智者、有力者の間に一成敗を見たるもの、み。素より社會の根底よりして變動したるものにあらず。即ち大革命は大革命なりしと雖も、國を擧げての革命にはあらずしを知るべし。

然るに此に大に注目すべきは、日本社會近來の進歩に在り。維新以來幾んど二々昔、千事萬物皆を新たありと雖も、初めの程は只だに政治の變革に止まり、苟しくも文明日新流の人といへば、



悉く政府の人とありて働らきたるを見ると雖も、明治の年齢も數を進むると共に、文明向きの人物も其數を増加して、限りあるの官途は限りあきの人に給せず、恰かも官途志願者の互ひに鼻を衝く今日を見るに至りたるに、一方に於ては開化次第に行届きて、學者日月に其供給を増し來り、自然供給需要の關係を變化して、醫師の診察料は昨日の高さに似ず、法學者の相場も舊の如くに高からず、世間の地位は次第々々にかたまりて、先進者は其地位を守つて容易に後進士人の侵入を容るさず、遂に學者の乾物を見るの恐あきにあらず。彼れ此れ以て朝野共に人物の多きに苦しむの勢をあしたり。然るに廣き世間の一方に於ては、文明の薰風次第に民間の實業社會に吹き及んで、近來新に業を起さんとするものは、迎も舊工商の舊筆法に依頼すべからざるを知るのみか、舊來

の地位を守るに付ても、兎角に新知識の必要を感じて、漸く知見を學者社會に迎ぐの勢あるを見るは、日本社會近來の新脚色として講者の注意しをる所あり。即ち近來に及んで、國中は商業學校又は工業學校等の設立と聞くと頻々たるのみか、實業教育を専務とせざる諸學校、諸學塾の入學生も、大いに商工の子弟を増し來れりとして、教師先生も私かに世運の變下來れるを驚ろくといふを見て、實業社會が文明の新知識を要するの意を窺ふに足るべし。又一方に於て國中の某組、某商社と稱する商工諸會社を見るに、學者先生の畑より出でて、其役員を務めをる者多きは、近來に著るしき事相にして、或は昨年何校の卒業生として新聞紙に記るされし者が、今年は某社の海外出張員として出發するの廣告を、其新聞紙上に見る等、學者と實業家との交際に一種の新生面と



後編

浮べたり。蓋し世事の複雑あるに従がつて、其事務と經紀とを  
 ますく復雜して、とて日本舊商工の單純ある頭腦にては、其  
 局面に當るを得ず、試るみに直輸出に付いて之をいはんに、日本  
 國のみを知つて世界を知らざる今の商人を以て果して能く其事を  
 經紀し得べきや、紐育の方角すら人に聞ひて始めて知る如き輩が、  
 如何に苦心したればとて、生糸と米國に直賣して、其手際の巧  
 みあるを望みうべしとも思はれず。既に直輸出とあれば外國爲替  
 の如き復雜の經濟現象に會するからん。其時に當り商賣往來の外、  
 腦中無一物、經濟の知識もなく、貨幣世界の事情も辨まへざる  
 の輩が、如何にして、爲替の賣買を全たくしうべきや。海上保險  
 を取結ぶにも、商律の心得はなく、一切他人の周旋に委して事と  
 すまず如きとあらむ、海上保險は兎も角、先づ其周旋人の保險よ

り始めざるを得ず。一言に評すれば、盲人をして人の美不美を判  
 斷せしむるに異ならず。曾つて甲州の蠶糸家にして海外の蠶業視  
 察を思ひ立ち、紐育に至りしものありしが、英語の知あきが爲め  
 に、紐育の客舎に幾んど一日間無言の業を修めたりといへり。事  
 の一例かれ共、見物の事すら尙ほ且つ然り。況んや考への立て方  
 にて、損失の一ならざる商賣の事に於てをや。朽ち腐れたる天保  
 流の商人を以ては、とて今後の活世界に馳聘して牙籌の算を立  
 つると能はず。日本國中何れの種族に此任を引受くべきものあり  
 やといはば、先づ學者の外に其人なし。即ち近來に於て學者と實  
 務家とが互に相接するに至りし所以の一あり。然るに視點を轉じ  
 て、學者の部分より近來の世の中を見れば、大學者ありと雖も、  
 懷中に金ちくしては、其高論も高論に通用せず、國次第に開くる



に従ひ、利用厚生の便、益々進むばかりよしして、之を買ひうるものは金あり。生計の度次第に高まりて益々錢を利せざるを得ず。然るに官海は既に人を容れず、代言社會は既に供給に餘りあり、在野の政治家を氣取れば益々貧究するのみ、學校の教師とあるも給料多からず、地方の學校教師は少しく多給あらざるにあらざるも、二三年間田舎の空氣を呼吸すれば、時勢に後れたる人となるべし。醫師の社會を見るも、新聞記者の市場にゆくも、供給の需要に超過して、兎角に不印の嘆のみ多きは、皆其揆を一にせざるはあし。然るに右の如き文字世界を去つて商人郷を見れば、死したる學者の頭腦を千金に買來りし例こそあけれ、前段云ふ如く學者の需要益々盛にして其供給は次がず。一方を去つて一方に就けば、働らさ次第にて金はトリガチ拾ヒガチの勢あり。是近來

に於て、學者が學者の里を辭して、商工の郷に就き、錢神宗の信徒とある勢を來せし所以あり。蓋し實業の野よりは學者を迎ふるに、學者學生の畠よりも自から商工に歸せんとす。其勢の赴く所を推究すれば、其中に自然日本第二の維新を惹起すべきの氣あるを窺ひ知るべきあり、此點より見れを國會開設の事の如きは、日本社會の一小波瀾のみ、當世の士人か功名を成すの時は二十三年の時のみならず、漸やくに來りんとする第二の維新を待つて、功名を策するの用意を爲すべし、我々妙齡士人の前途はまた多望にあらすといはんや。

時勢の變遷に驅られて、今の學者と商人とが互ひに相寄り相接せんとする勢を來せるは、是異日我商人世界の面目と一新する原たるべしとせば、余は重ね又重ねて世界の江州商人たるべきを勸めて已ま



ざるものあり。當世の士人が此迄は官途、文事の諸般に用ひ來りし其智力と氣力とを轉じて、之を商事の幹旋に用ゆるの事、日本の商世界に周行するに至らば、海上萬里の壯圖を持って、纜を横濱に解くの新江州商人なからんや。蓋し今日の商人に此事の行かはれざるのみか、其事を思ふものすらさきは、是れ全たく外を知らざるが爲めあり。何の處に何の市場あるを知らざるが爲めあり。何の市場に何の貨物あるを知らざるが爲めあり。之を知らんとするの氣力あきが爲めあり。假令<sup>之</sup>を知れりとするも之を實試するの氣力あきが爲めあり。將た又之を行ふに不便あるの事情あるが爲めあり。然るを前さに言ふ如く、學者の歸商して其智力、氣力を以て此般の不足を補はば、天賦自然の利益を有する此商國の未來は、必らずや大ある未來ならずんばあらず。學者歸商の事より、將來に生ずるの結果は豈夫れ微小あらんや。

### 第三章

#### 商人の學問。

前章に陳べたるが如く、近來に及んで、學者歸商の説頻りに先覺者の間に行はれて、漸く世の人心を動かさんとする勢あるに従がひ、數多き書生の中には、歸商の熱望を起して、其用心に急がはしきもの甚はだ少からずと雖も、事の裏面より、其心中を探れば、商となるの望は起したるも、其方便と得ず、前途茫茫、望洋の歎あるものまた少なきにあらざらん。身若し商家に生れたるものに在つては、



修學の後はその家の商賣に従事して、漸やく商賣に慣るゝの便もあらんと雖も、身元來商に出でず、知字一片の人あるに於ては、直ちに商店の主人となつて算盤を執るとの素より能はざるが故、先進の商人に附いて其雇人となり、以て漸次商賣を見習ふの外あるべからず。即ち其習ひ得たる文筆の能と以て、商家の書辨となり、朝夕出入の帳々を見るに於ては、自然世辭の言ひ方も覺ゆると共に、四角八面の風姿も去り店頭の談話により、往復の書狀により、帳面の記事により、覺ゆるとも亦く、商人社會の事情を解して、錢儲けの甘苦は零ば斯の如きかとの發明を志すとあらん。此に於てか文字の知に實際の識を加へて、兩全の働らきあるに及ば、漸やくに主人の重用を受けて、多々商賣の活務に當り、益々商法の妙を覺へ、時に失敗もあらんかかれ共、進退掛引の工合まゝ巧みを現はして、人の意表に出るに及ば、信任を置くもの、豈唯其主人のみあらんや。不幸にして主人に人を視るの明なしとするも、世間の廣き、偉器を知るの活眼家に乏しからず。遂には貸すに資を以てする人あるに至るべし。即ち書生よりして商家の書辨とあり、遂に以て自から商とあるの道行きにして、其然ると然らざるとは、只だ其當人の才能、心掛け如何に在るのみ。本書の與からざる所ありと雖も、試に著者をして商家の書辨たるに要する普通の技能を言はしめば、零ば以下の如し。

普通教育の必要なるは説く迄もあし。

手書を善くすべきと。

今の書生の中には商人に手書を善くするの最も肝要なるに思ひ當らず、書は以て姓名を記るすに足るのみと言つて、習字の事を等閑に



する者少なからず。無勘辨の事といふべし。書法の亂雜あるは、醜にして且つまゝ、間違を起すの恐れあるにひきかへ、墨鮮麗の書狀には之に接して快きに加へ、早く讀下し得て、間違を與へず。現に横濱の外國商館等に於て葡萄牙人のクラークと見ると多きは、其筆跡の如何にも美しきが爲めあり。商人の世渡りに善書の必要なる所以と知るべきあり。

手書を讀とに熟すべし。右の如く手書を善くするの商人に必要あると同時に、早く手書を讀むに慣るゝとの要を忘るべからず。即ち書法亂雜一寸見わけがたき書狀をも一見してスラー／＼と讀み下しうる機に、其目をあらしむるの言ふして。手簡の取り遣り尤も頻繁ある商人の身に取りては、殊必要なるを知るべし。然るに今の所謂書生の中には、楷書の字體と以て記るしあれば、文選の中に見る如き

難文字ともたやすく讀みうるにひきかへ、商人の實際に最も便利なる草書を以て認めたるの手簡は、始めより終り迄滞りなく讀みがたき輩も少からず。嘗つて商人學者相寄りの懇親會を催ふせし折會主ある某商人より或る書生に宛て「準備の都合も有之候に付貴方の人數は幾何に有之候や伺ひ度候」との短書を送りしに、草書を以て認めしが故、書生先生の目には人數の數の字を見まぢがへ人類と讀み下して、「失禮あるとよ、余等を殊に呼んで人類とあす」とて大に立腹せしとありしと聞けり、事の一例として見るべきなり。又横文の手簡は之を讀みなれざる人の眼には別して難澁を覺ゆるものにて、曾つて著者の知人にして横濱の外國商館に住み込まんと欲し、其商館に至りてコッピイソング、クラーク(寫字生)の試験を受け、早や書きに認めたりし書狀を寫すに當り、トント其文字を解せず、其任に堪へず



して断はられたりしは、著者の同道して親しく傍觀せし事あるが、馬ユローレのウォーレン、ヘスチングを讀むとを知りて、日常普通の手紙を讀むとを辨まへざるの失あり。故に和洋兩文共常に心を用ひて其手書を讀み習ふとを務むべきなり。The Youth's Business Guide. (先頂渡邊某の譯して「文明」に手書讀習のとを論じて曰く「印刷を業とする者は、其實地の經驗に學んで、原稿の記者自かすら、時に解しがたき程、亂雜ある文字を容易に讀みうるを能くす」と。クワックを望む者もまた日常の習練を積んで此に至らんとを要す。算術の能の商人に必要あるは申す迄もなきとあがら、一二讀者の注意を乞ひたきとあきにわらず。學者學生の常として卑近なる事は之を忽かせにするの風ありと雖も、最も卑近あるとは最も必要のとあり。代數學は能くするも、却て卑近ある加減乗除を巧

みにすべきを知らずして、漫に高尙の事のみ走るは、實際の損得を知らざるの所爲あり。殊に銀行等の業に就かんとするには、最も加減乗除を速やかにして誤まらざるの能を備へざるかべらず。而して暗算の技能も、また商人にとりて必要あるを忘るべからず。

簿記學の商人に必要なるはまた言はずして可ありと雖も、殊に書生より身を起して商とあらんとするものには、大切の箇條ありといふべし。其故は書生か商家に職を執るの始めに於て、早速商家の用に立つ藝能は、帳面を記るすをにして、帳面方とあり、日々の取引勘定を記入する中には、自然商賣の具合を會得するの便あるが爲めなり。三ッ井物産會社に於て書生を使ふに、先づ簿記方とあして商賣取引の模様と知らしめ、其慣るゝに従がつて、



漸次他の仕事に移らしむといふは、事の一例として見るべきなり。外國語の能。英學の知能は今の商人にとりてとりわけ必要あるとも、また言ふ迄もなきとながら、今の書生の中には、英學の知ありて英語の能なきものあり、龍を畫いて眼を點せざるものにあらずや。英語を能くせる上に於て、尙ほ獨語、佛語等を能くせば、龍に翼を添へたるに異ならず。其余裕あるものは世界の三大國の言葉位は、修めをきたきものにあらずや。

商用書式、商用熟語、商用書簡等の習讀。

此にいふ商用書式とは英語の所謂 Business form. の謂にして、約束手形、爲換手形、船積證書受取書、書き出し、荷物送り狀、賣上仕切狀等總て商賣上に用ゆる各種の書式を云ふ。著者の殊に商用書式、商用書簡、套語等を學ぶとを勸むる所以は他なし、商用の

書式にはそれに限りたる書き振りあり、花見誘引の書狀と品物注文の書簡とは、素より趣きを異にし、一方は飾りを入れて文を成すに、一方は可成文の短かくして用の足るを欲するが故字を切り章を縮めて自然一種の文體を成したり、其中には商賣上に存する入組たる仕組等を、一語を以て言現はしたるの熟語もあらんが故、之に慣れざるものに於て之を讀むときは、全く其意味を解するに苦しむと少あからず。始めて賣上仕切り狀と讀んで其末頃にあるE.の二文字は Errors Excepted. とて間違は右の限りにあらずと斷りたるものとは覺り易からず。曾つて著者の如きも、米國紐育より生系のとに付き送りこせし、書狀中お Book of silk. といふ文字を讀んで、生系の一書と解したるに、文意更に通せず、當惑の餘、知己の外人に質せば、何ぞ圖らん、右は生系の一把と申す意味



にして、Book は生糸商事上「把」といへる熟語に用ゆとの解を聞ひて  
 獨り自から感得たるとあり。去れば歸商の心掛けある士人お於て  
 ば意を用ひて右の數者を學ばんと尤も必要にして、著者の經歷に  
 徴して立言する所のものあり。

右は主もに英文のとふ付一言せしとあるが、日本文のものに於ても  
 全たく其講習を怠たるべきに非ず。假令へば株式賣買の套語にある  
 「大手筋」とは如何、生糸取引にある「拜見」とは如何と、其類の事柄を調  
 べてよく商賣社會の狀に通ずるは、豈肝要あらずとせんや。

速記法 の如きもまた學びうべき餘力あらば學びおきたきと考  
 ふ。會社の總會に列して其議事も速記する等の便利少あからざるべ  
 きあり。

商業地理及商業史の知識。東西を知り、産物を知り、東の市場に

安ければ西の市場に賣り、南に多きものは之を北に運び、即ち最廉  
 の市場に買ふて最高の市場に賣るを商人の技能ありとすれば、國々  
 の方角、物産を知り、産地と市場との距里を知り、其産物を持ち來  
 すの航路、方便を學んで、其都合よきに付かざるべからず。彼と我  
 との貨幣度量衡の割合を知らざれば物の勘定も出來べからず。即ち  
 商業地理を學ぶの必要ある所以にして、昔と事異ひ、世界の需用供  
 給を見て、商利を算するの今日あれば、殊に之を學ぶの已むべから  
 ざると知るべし。The Youths Business Guide. (少年就業案内)の著者  
 其學び方を説いて曰ふ、地理書は多く世界全體より説き始めて、そ  
 れより歐洲をとき、次に英國を説くと雖も、余は其反對を學ばんと  
 を勧むるあり。先づ第一に己れの住む町内の位地を知り、其近傍と  
 學び、それよりして其市府に及ばし、追次して其國及び自他諸國を



知り、遂に進んで世界全體を學ぶべし」と。また一説として見るべし。又各國の商業史を知るは其繁昌の基する所、其商業の發達せし模様等を知るとなるが故、商人の世渡りをあさんとするものは、其一般を學びをくべきなり。

經濟學。物價の高低、貨幣の増減、勞銀の上下、恐慌の原因等商賣に關係ある事情の知識は、經濟學の與ふる所ありとせば之を學ぶの必要なるともまた自から明あるべし。

商法律。法律の事は理屈なり。商賣の事は金儲けありとせば、法律と商賣とは、斷へて縁なきに似たれ共、事の實際は決して然らず。買賣契約の事を始め、萬事萬端商律の拘はらざるものは幾んどこれなきが故、商律の心得あるとあらざるとは、大に損得を殊にすべし。老が知あれは、損害を未萌に防ぎうべく、又事起るに於て老を

に處するの道を了し易かるべし、去れば其大體又は學得しおきたきものおあらずや。

右は何れも商人の世渡りをあすべき人の養ふべき知能にして、また學生より商に歸する人と其人あらざるとを問はざるあり。稱して商人の學問とも申すべきなり。

#### 第 四 章。

壯年士人に寄語せんとする所の者あり。

前章既に商人とありぬべき人々の養ふべき藝能を論じたり。論じて此に至り、其藝能を以て地位を商賣社會に求め得たる後、如何に身



を處して其志を成すべきや。即ち商人の徳行たるものを説くべき場  
合をあらわす。

商界に身を委ねたる後進士人の務むべき所は、綿密に商賣の事情を  
観察して其委曲に通じ、立派ある身持を以て先進商業家の信用を買  
ひ、朋輩の愛敬を博し、進んで獨立獨行の商人となり、慘憺たる苦  
心を閲し、南船北馬の勞を積み、遂に身の一大好運を開くに在りと  
雖も、此事たる少壯士人の思へるが如く、智の働きのみを以て成し  
うべきにあらず、大に徳の力に依頼する所あるが故、後進の人々は  
商の生活を始むるに當り、其前に横はる徳行上の責任を知つて、豫  
じめ堅固の決心を持たざるべからず。  
苟しも是非を分別するの心あるものは三様の責任を負ふものあり。  
其造物主に對し世間に對し、其身自らに對して有するの責任は、已

れ如何に智力あればとて、如何に腕力の強ければとて、到底免がれ  
うべきにあらず。假りに造物主に恥ぢず、世間に恥ぢざる如き無勘  
辨のものに於ても、放志亂行、立てたる目的を失し、幸ひを來すべ  
き機會を去らしめ、哀れむべき生を送つて絶望の死を迎ふるに至ら  
ば、誰か其本心ふよつて其責を盡さざりしと、身に恥ぢざるものあ  
らんや。

人の徳行上の責任を論ずるは本書の趣意にあらざるが故、敢て之を  
言はずと雖も、後進の士人に對し其生活を始むるの初途に於て、よ  
く其身の分際を知り、人の責任を重んぜんを望まざるを得ず。本  
書は即ち商人の生活に伴ふの徳行を論ずるに限ると雖も、意を用ひ  
て以下の所論を見れば、若年の身にふりかゝるべき危難と、其方さに誘  
れ易き誤謬と、其身に得がちな惡習僻とを學んで、深く自から戒



しむる所以を知るべし。其中には著者が自から實歴の上に覺りたる  
 の意見も少からず。讀者言外に其説を解して深く省みる所あらば、  
 本章編述の微意を満たすに足れり。

私を制するの習慣を養ふべし。

壯年の士人にとりては、其私を制するの習ひを養ふに優さる大切の  
 とはあらず。英語の所謂 *Self-denial*。ふして、此性を以て其身を規す  
 るにあらずんば、此上もなき好機會も、光りある才力も、功名の助  
 けとはあらずして却て危難災厄を迎ふるの原ともあるべし。

壯年の時には氣未だ定まらず、經驗未だ積まず、身の四方に己れを  
 誘ふの悪魔を以て満々たるも、悪魔は悪魔を以て其前に來らず、交  
 接を好むものには、知己の形を以て來り、始めの程は其容止を忌む  
 と雖も、其とりなしの甚はだ面白きは誘はれて、漸やくに交りを其

輩に結んで、遂には其風に慣染するに至る如き、若くば其人の短所  
 として外見と飾るを好め、其身の分際に適はざる衣住をあして無  
 用の散財をなす如き、其他酒味色の樂に荒んで一生涯を誤る如き、  
 何れも壯年客氣の盛んある時ありがちの不幸あるが故、務めて  
 其私を制するの習性を養ひ、悪魔の誘ひの外に立つて、身の失敗を避  
 けざるべからず。人の成しうべき最大の勝利は其己れを制するの勝  
 利なり。 (*The greatest victory that any man can gain is said to be the victory over  
 self.*) とせば、之を誤るものは是最大の失敗を爲すものにあらず  
 や。去れば妙齡の士人が商人の生活に入りし當初に於て、其同輩よ  
 り其知人より様々の誘ひを受くるとあるに當り、よく己に克つの旨  
 を守つて、多くの青年がなす如き、其處世の初途に失敗して、其餘  
 生を誤まるの不幸を避けざるべからざるあり。



費、エをいして儲けに超へしむべからず。

壯年の人々の常に心掛くべきとは、其費やす所をして所得の額に超へしめざるおほり。「人もし年々二十磅の所得を収めて十九磅十九志六片を費やさば、幸福の人たるべしと雖も、若し二十磅を散せば則ち薄命の人たらんと。カリー、エツグルストンの生計論(How to make a living)に呼でんミカウバーの規則と云へり。其収入の中お生活すべしとのとは、素より自明の理にして奇とするに足らざれ共、人事の實際に於て、年々歳々相も變らず、其儲けよりも多く費やす人あるは、異常の事にあらず。今年勞して五百金を得たり、遊んで六百元を散せり。來年は何等かの奇利を策して、其不足を補はんとして、意の如くならざるは人事の常あり。其年末に至りみれば、六百元は益しゑたれ共、七百元の出費あり。去年を回想して除夕孤燈の前、

「來年は」と暮れけりとの歎を發せざるを得ず。蓋し其費用を節制して其收額を超へしめざるを務めざるの罪にして、眼前の蛾眉曼睩に迷ふて、注意を其心より去り、今月の儲けを超過すれをとして、今月限りの世の中にあらず、エ、マ、ヨ今に散じて後に收めんのみとて、過去の勞と以て現在の樂を買はざるは勿論、現在の勞を以ても尙は且つ足らず、未來の勞迄をも書き入れにするものあり。甚だしきに至つては、今月の衣食は數ヶ月の未來の勞に屬しをる等のともあらん。其輩に在つては、將來の勞苦は更に新快樂を身に與ふるの望みなく、既往の舊歡樂の爲めに驅られて奔走するの狀あるが故、働らきの樂み薄すく、勞に勞を積むも容易く舊惡報と消すべからず。満腔の不平遣りがたきを如何とて、酒を呼んで僅かに其不平を慰するものあり。此に至れば常に悒々として樂しまざるの境に立つ



もの良して、注意謹慎の以て之を避くべきものあらば、此不行を却けたきものにあらずや。畢竟するに常に謹んで、其収入の中に其費用を扣へざるが爲めなり。百圓の収入ある人にしては百圓を費やすべからず。常に其幾分を殘餘して不慮の出費に備へ、また後日の資給に供へざるべからず。百十圓を得るに及んぞ始めて百圓を費やすべし。百五十圓に至つて百三十圓に進むべし。百圓を收むるの時に、既に早く百圓を消するは、注意の足らざるものにして、遂には支出として収入を超へしむるの端緒を開くべし。見るべし、ミカウハ一の規言甚はだ妙にして事の真相と盡したるを。論トて此に至り、右の規則を超へざるには如何すべきやといふに、先づ借りをあさざるの決心を爲し、第二に私を制するの心掛けと、其決心を實地に行ふの道を務むるに在るのみ。筆を

借リ

の事に轉ずるの場合に達せり。借りはなし易くして、之を返すは中々に難きものにて、一たび借りをつくれれば、また容易に之を脱しかぬるが故、終始借りの奴隸とあつて、不快の生を送るもの今の世間に少なからず。立身の望堅き壯年士人の深く戒しむべきとなり。思ふに其世渡りの初步に於ては、毎月限りある所得を收むるに過ぎざるに、身の四邊には見たきもの、聞きたきもの、味ひたきもの、試るみたきもの、窳窳たる姿容を以て散滿するとあらん。此時に當り、其費やす所をして其所得の限り内にあらしめんとするには、總て現金を以て其要用物を買ふに如かず。即ち借りを避くるの秘義にして、衣古びたりと雖も、金あられざれば新衣を誂らへず、靴美あらずと雖も掛ケを以て新靴を製せず、仕立屋に一文の借りなく、靴工に



一錢の債なく、債鬼に追はるゝの苦勞をさけて、安らかなる生を送るは、人の美德として士人のまさに務むべきとあり。

掛買の不利。

買物をあさんとするに當り、「御勘定は御都合のよき節にてよろし」として巧言令色、掛賣りを以て品物を勧むるは、商人の慣手段にして、一寸都合よきものなれ共、其都合よきは即ち其不利ある所以なり。其結果として、實際要せざるもの迄をも買ふに傾むくを免がれず。他日迄代價を仕拂はずして可あるときは、十圓の買物にてても、現金にて買ふ二三圓の品物より、人情は之を些細に見るものあるが故、現金にては決して品物を買過すおは至らざるも、掛ケを以てすれば、兎角に多數を買ひ、仕拂はさすに憚かる所あるも、注文は知らずく之をちしがちにあるを事の常勢とす。素より早晚勘定日の來るは、

前以て明らかになるとあるも、買物をあすの當時には、さのみ之を氣附けざるが故なり。去りながら品物を受取り次第、左から右へ直ちに代金を拂渡す場合には、自から其心に問を發して、「此物あきも濟むべきや」此物は欠くべからざるか「之を買はざるを得ざるか」と其要不要に思ひ至るが故に、物を買過すの失は自然之を避くるを得べきなり。然るに賣人の方より見れば、掛ケにて品物を買れば、金子を遊ばしをかざるを得ざるのみか、間々其客先きに不運の事あれば、全たく其代金の貸し倒れとあるとさへあるが故、掛ケ買をあすは其信用の利子を拂ふのみに止まらず、掛ケ倒れとある危険の報償をも負ふが故、畢竟割の-high品物を買ふに歸すと雖も、賣人の方には、現金を以て買物をなす人程、善き得意とはあらざるあり。去れば心ある人は深く其邊を熟慮して、掛買の不利と避けたきものにあらずや。



過去の快樂の代價と拂ふは、人情に於て、何となく金を棄つる如き心地あるゆへ、掛買に掛買を積みたるの結果は、勘定殘金に殘金を加へて、終には株立ちたる負債を必ずに至りぬべし。事の結末は、借金に依頼して之を方附くるもの甚はだ少からず。かくすれば一難を去りたるが如くに見ゆれ共、其借金自からは、後に残りて返済を要するが故、つまり借りを左右にせし迄のとあるのみか、其借金の爲めに朋友間の交情を破り、他人の擯斥を招くに至る。掛買の餘毒甚はだ大あるを記憶すべきあり。

借 金。

西洋人の諺に *Neither a borrower nor a lender be.* といへるとあり、譯して「借主ともある勿れ、亦貸主ともある勿れ」との意味あり。世の真相を見抜きたるの言にして、數年の交際も、金の貸借より破れたるの

言 家

例は甚はだ少なしとせず。友の難を救ふの心より貸したるの金銭あれ共、之が返却を怠たるを見れば、兎角に不快の情を起し易きは人の常情あり。之を借りて其恵に與りたるものに於ても、屢々其催促を受くるに於ては、其恩と忘れて、却つて其薄情を咎むるに至るべし。事の極は、雙方互ひに面を會はするさへ忌まはしきに至る極端の例も少からず。金銭の貸借を謹しまざるの罪あり。故に已むべき事情より、金銭の助けを借るべきとあらば、只だに知己親交の由縁ある人を煩はさんよりは、其兩親又は骨肉の許に至りて、在体に其事情を告げて、其憐れみを求むるをよしとす。右は其必要のありし時の心得迄に記るせしものなれ共、先きを慮ばかり用を節し金と蓄へて兩日に對するの (*against a rainy day*) 用心を怠たるべからざるあり。

若し不幸にして借金をあす餘義なき事情に會せば、其借りたる金は、



之を借らんとせし目的の事に用ひて、秋毫も之を他に轉用せざる  
 とを期すべし。債鬼の督促に堪へずして、他より借金して、其ヤカ  
 マしき負債を方附けんと欲し、事情を其人に打譯けて、其金と借り、  
 金の顔を見るに及んで、忽ちに心變りして、過ぎにし快樂杯と追  
 想して、一念止みがたく、遂に其一部を以て舊債鬼に送り、以て其  
 催促の火焰を斷ち、他の一部は新らしき快樂を買ふの資とあす如き  
 は、壯年の人にありがちの事例にして、所謂咽元過ぎて熱サを忘る  
 べしものなり。人は斯くくくの用に供すべしとの言を信じて、之を貸  
 し與へたるものあれば、最初の目的通りに、之を使用するは、金を  
 借るもの、名譽たることを忘れざれ。第二には返却の義を等閑にせず、  
 何月何日に御返濟すべしと契ひたらば、必らず其約束を破らざる  
 様、務むると、金を借るもの、名譽とす。如何ある苦を忍んでも此

名譽をとることを怠たらざれ。

外見を飾るの不利。

今の世の中に於ては、魯褒の「錢神論」にも言へる如く、錢多き者前に  
 居り少き者後に居り、時の事總て錢を以てあしうべきが如くに見  
 ゆるが故、世の中の所謂才子たるもの、動もすれば金あしど人に思  
 はるゝことを恐れて、其實力に添はざる富者の虚粧をあし、以て巧み  
 に世眼と瞞せんとするものあり。所謂山師の玄關あるものにして、  
 設計妙あるが如くあれ共、目前一時の妙にして、事の結極は、其身  
 を害するの外あるべからず。實力の許さるる虚飾をあすには、無理  
 の金錢を散せざるを得ず。邸宅を飾り、輕裘を着、肥馬に乗り、偶  
 々人の來訪するに會へば、酒食の美を以て其假富を誇示し杯して、  
 諸事万端に多錢を散じて、富者の觀を粧せば、一時は其案の如く、



富者の空譽を博せざるにも限らずと雖も、其金は天より來らず、地より出でず、歸する所は金の切迫を告げて、其貧を加ふるに外ならず。人に金なしと見らるゝを氣附ひ、表面を派手につくらうの餘は、却つて其實力を害して、尙ほく其貧乏を増すに至る。金なきに、權謀術數以て富人の虛名をとらんとするは、漸やくに金を利し財を積み、一歩く其實力を養ふて、其實力より富の光りを放たしむるに何れぞや。後進の士人は世間狡兒のあす所を學ぶべからざるあり。

服粧論。

今の會社銀行等にある年少の人々を見るに、兎角に服粧に奢るの跡あるは、著者に於ては、其輩の前途の爲めに甚はだ不利あること信せり。即ち此服粧論を此に挿さむ所以にして、其輩の注意を求むる

のみの爲めにあらず、深く後進の士人に向つて其前途を戒しめんと望まんと欲してあり。只管に讀者の熟慮を乞ふのみ。

服粧に侈るの弊は壯年にありがちの流弊にして、畢竟は徒だに一片の空譽を得んとするの心より起るのみ。之を變言すれば、我か服粧と脩めて市中を歩すれば、路人の我を見ると多少高さを加へん杯との想像より、盛んに衣服を飾るとあらんと雖も、事の實際は全く其想像に反して、智慮ある人は、服粧家が苦心の餘に出でし楚々たる衣裳を見て、別に感ずるを止めず、金満家は其服粧の侈れるを見て、心私かに其人を擯斥するの念を生じ、其人と同一様の嗜好をもてる自餘の服粧者流は、其瀟洒たる風姿を見て、之を可みするとはせずして、口頭に陽に之を褒めはやして、心中に陰に之を猜忌をさらふの状あるは、世故に老けたる人のよく知る所にあらずや。素より人



の服粧は其分限地位に應ずるを要するものあるが故に、醫師はまさに醫師の容儀を修むべきは勿論の事なれ共、其職業の何たるに論ず、漫に費多き粧を作すべきの道理は、毫も之を見出すべからず。蓋し其外観を粧飾して、之より何等かの益を得んと期待するは、世情を知らざるもの、見のみ。人の價值、豈に其外見の美不美に存せんや。世間の男子より尙ばるゝと、尙ばれざるは、其身の腕前と心志とによれり。智慮淺き婦女子の上には、美服偶々或る功を奏せざるにはあらずと雖も、滔々たる浮世の眼目は、其人の表粧のみに止まらずして、尙ほ深く其裏面に入つて、よく其黑白を判つなり。もし夫れ一片の美服よりして、其佳人を求めうるともあらんかされ共、美服を見て妻とされる其妻に、節儉智慮の如き良資の以て、其良人を幸ひすべきものあるを望みうべきや。覺束あきのとあらん。

人に存せる天然の美こそ、男女を通じて、其愛敬を買ふの力あるべしと雖も、何ぞ必らずしも費多き衣服を以て、人爲に之を飾るを要せんや。自然の美容其身にあらば、婦人の慧眼なる、たとひ半面髻を以て掩ふと雖も、其美を知るに餘りあらん。服粧はまた其人の志をも表するものあれば、見識ある士女は其派手やかある服飾を見て、其美あるを賞せずして、以て其心志を忖度すべし。之を要するに今の少壯士人の多くあす如く、種々に心を凝らして、其服粧を脩め、手掌に香を薫たればとて、差して其苦心に報ゆるの利益とはあく、只だ淺慮ある婦女子より、「某さんは様子よし」との一空名譽を贏し得るに過ぎず。然るに之が爲めに識者の擯斥を招くとあるのみか、夥たゞしき散財とあすを知らば、楚々輕鮮たる風姿の、其身の實利に害あるを悟るべし。



以上行文の旨意を誤了して、讀者著者を以て、破れたる襦袍を衣て無顧着ある子路を學べよと説くものとせば、著者の冤罪もまた極まされり。其分限に順卜て、其服粧を修め、曾つて身の形り振りをくづさず、人をして其人に接して清きを覺へしむるは、是れ人の敬愛を買ふ所以あり。身の形り振りをくづさざると、身形りを飾るとは、全く別物に屬す。Advice to Young Men. (少年規箴)の著者ウイリヤム、コツベットの言に有之、汝の着服の品柄を氣附けずして、汝がシャーツ(襯衣)の色を氣附けよ。事情の許るす限りは、其身を清くせよ。去りとて汝の美にして費多き衣服の爲めに、人は汝を敬愛すと思ふは、非ありと。著者の本意また此に外あらざるあり。

以上は何れも商人の生を送らんとする壯年士人が其身の戒めとして知りておくべきの事にして、之を以て其心掛くべきことを盡したるにはあ

らず、著者の其輩にとりて最も戒しむべき事と信せる箇條のみを記したるのみ。素より香もなき味もなき平凡一色の陳腐論ありと雖も、細かに壯年士人の身を誤りたる筋道を探查すれば、多くは此般の數事に起原せるを知るなり。世間の實際に於て、身を誤まるものは才子の畠に多くして、功の却て不才子の手に成るを見れば、不才子天下の世の中に見ゆれ共、才子の才を頼んで酒色に荒み、かつて謹しむ所あらざるが爲めにして、即ち才の罪にあらす、才子の罪あり。當世の士人もし一个の燕雀才子を以て、自から甘んせばそれ迄の事あり、本書の與からざる所かれ共、挾持する所のもの甚はだ大にして、高く望を當世に屬するものは、少年の浮氣を填して、涵養恐耐する所あらざるべからず。謹嚴警戒する所あらざるべからず。讀者所論の甚はだ俗あると答めずして、深く自から考へ、身の實踐



は省みる所あらば、蓋し悟る所なきにあらざらん。

Business (事業論)の著者マエームスプラット、嘗つて人の成功を美人に比して尤も熱心にして最も親切なる媚人、獨り其真情を買いうべしと申せり、比しえて甚はだ妙にして、青雲の壯圖あるの人は、其少壯の時と犠牲として、其身をして壯時の感情客氣の使ふ所とせしめず、笑を含んで我を迎ふるの快樂を遠ざけて、滿腔の熱氣を以て滿心の事業を経せざるべからず。嗚呼滔々たる三千世界の少壯士人、美人の爲めには、最熱心最信實を盡すを知るも、身の成功の爲めには、曾つて一滿心なく、一信實なく、而して漫に好運來れかしと求む。嘆すべきの至りにあらずや。世間有爲の男兒、成功を美人に換へ、之が爲めに務め、之が爲めに忍び、之が爲めに泣き、之が爲に笑ふべし。區々の行、半心の業、豈此五十の短生を送るの道あらんや。

らんや。

## 第五章。

### 學者の歸商、及其實行。

近來の時勢を見れば、從來は遠く離れたりし商人と學者とが、互ひに相寄り相接せんとするの風を生じ、例せば國中の某組、某商社と稱する諸會社に、學者學生の畑より出で、其役員を務めをる者多き、或ひは昨日迄新聞記者として理屈を商賣とせし人々が、今日は商社の支配人と化して、金錢の送迎に繁がはしき等、近來に著るしき事相にして、漸やくに學者の智能を商賣實業の活務に用ゆるの様あり。



り。即ち學者の歸商にして、商人の部分より申せば、錢を以て學者の頭腦を買ひ、時勢に應じて商賣する次第あれ共、轉トて學者の部分より言へば、商に歸し、商を學び、遂に商とあつて、世の金權を其手掌に握らんとするの手段にして、愉快此上もあき話なれ共、其所望の如く、金權の所在を轉トて其手中に移さんとするは、中々の難事にして、容易く之を言ふべからず。著者の見識にては、金權の移、不移には頓着なしと雖も、今の商人が學者の技能を假りて、巧く當世に處するを望むと共に、學者も亦た其志願の如く、商人とありうるの未來あるを望まざるを得ず。思ふに商業學校杯より出で、商海に歸身する人は、今後益々多きを加へて、商賣社會の東西に學者の散在を見るとあらん。著者の喜ぶ所あれ共、若し其輩にして徒だに身を商界にをきたる許りのとにして、曾つて商賣の委曲に通ず

るの工夫に乏しきともあらば、學者歸商の説、花ありて實あきものあり。著者が既往現在の實際に考へて、今より其未來を氣附ふ所にして、今後はいざ知らず、從來書生の里より出で、商家の門に入りたる人と見るに、多くは商店の帳附けとあり、銀行の事務員とあり、或ひは外國商館の通辨とある等、種々の道に就き、種々の用ををしをると雖も、身に仕入れたる藝能を賣つて給金を取るの一段に至つては、十中の九分九厘迄は、皆一色に出で、曾つて新生面を示すものあらず。平らに評すれば其れ丈けの仕事をあして、それ丈けの金を取り、以て世を送るとあれば、敢て其餘を求むるには及ばざるが如くあれ共、著者の充分の所望を言へば、其給金取りの生活を漸やくに去つて、自から主人とあり、眞に商賣錢儲けの活務に執掌するの一事を以て、學者歸商の事となしたきあり。思ふに今の商界



にあつて書記とあり簿記方とあり杯して、給金取りの生活を送りつゝあるもの、中には、徒だに百圓に満たざる給金を以て満足し、一書記に甘んじ、一ヶの簿記方に安んじ、また其他を顧みざるもの少からざるが如しと雖も、また一方に於ては著者と同説同感にして、胸中私かに其工夫に苦心するもの少なきにあらざらん。此流の人ある、著者の屬望して共に前途を語るべきの人あり。此に於てか一言の以て其人々に寄せたきものなきにあらず。

著者の其人々に向つて寄語せんとする所とは他あり。

商とあるの望を抱き、商界に歸身せば、學者の氣岸を脱して、商人根情を持つべし。

との一事あり。蓋し學者の事は甚はだ高尚にして卑近ならず。曼帝の崩御を聞きては歐洲政海の治亂を氣附ひ、春の花、秋の月見るま

ゝに其吟料とあり、菊叢の中に坐しては、滿手に菊を把つて、陶家の故事を慕ひ、除夕青燈の前、世間の繁がはしきに頓着せず、詩句除るに年を守る等、其事甚はだ洒落ありと雖も、商人の事は全く之と黑白にして、治亂の變ありと知つては、忽ちに金を儲くるの筈なきやと掛念し、李花の香を賞せんよりは香水の香を賣らざるを得ず、月光に嘯かば月世界に生糸を輸出するの道なきやの思案も出づべし、菊花の黄には金貨の黄を思ひ付きて、轉た其多少を氣附ひ、大晦日には朝より馳せ廻りて夕に金の不足を嘆せざるを得ず。萬事錢の臭氣を帯びて、趣き甚はだ俗なるを免がれず。蓋し學者と商人との區別にして、學者眞に慕はしく、商人實に忌まはしきに見ゆれ共、商賣にはまた商賣の樂あり。世風の吹き廻はしを觀て其結果を想像し、見込掛引果して其的に中れば、一舉に千金を獲するも容易な



り。昨秋の仕入れ物は時の流行に背きたりとして、不捌けたりし失敗は、一の経験とあり、後の戒しめとあり、今春の商事は殊に勝算多き等、商賈人の樂は敢て有形の錢を儲くるのみに止まらず、商機を相して張弛進退以て勝負を見る無形の樂みは、實に無限の味色ありて、即ち平和の乾坤にナポレオンの事をあすものあり。然るを况んや、多錢よき天下の萬權力、萬福德を買ひうるに於ておや。商賈の樂味甚はだ大ある所以を見るべし。去りながら右の樂は、商人の事を好むもの、感じらうべき樂にして、學者根情を存する者には、其事却つて面倒あるが如く、卑近あるが如くに見へて、夫の樂みを樂みとする能はず。既に其事を懶しとせば、之を學んで其妙を了る能はず。假令其志に於て、之を學ぶの心あるも、其氣之に趣まざれば、到底其委曲を極むる能はざるあり。事に例へて三絃の嗜み深き娘子

をして、厭ふ所の手習ひを稽古せしむるに異ならず。上達の望なきものあり。故に今の學者學生にして、國運の漸やく商賈殖産の上に傾むくを見て、歸商の志と起し、商人の社會に歸着せば、其日より學者根情を蟬脱して、商の甘苦を以て其身の甘苦とあし、以て商賈の事情と習ふの必要あるを見るべきあり。

前段言ふが如く、學者と商人とは其趣きを殊にし、其甘苦を異にするが故に、學者の根情を以て商界に立ち、其萬般を觀察すれば、事々に卑しげお思はれて、其手を觸るゝも忌はしく、漫に自から其身を高きに處して、千里の才は百里の才に非ず杯いふて、其事を放棄し顧みざるに至らんとす。現に今日の實際お於て明白あるとおして、**商業學校杯を卒業して、**商賈の實務に當りたるもの少からずと雖も、多くは其一技一藝あるに誇つて、簿記方と務めたるもの、



容易に品物の陸揚げに關はらざる等、漫に其身を高ふして卑事に接せず。随がつて洋服を着するの紳士、來店すれば、恭しく禮をさすも、綿の羽織、唐棧の前掛けを着けたる率直の商人に、容易に寒暖の挨拶もあさず。然るに件の商人却つて金満家にして商賣上手の人あり。右の紳士は今の所謂偽紳士おして、巧に算盤をはじくも、常に損のしがちある人たる等の奇談もあらん。要するに其根情の學者あるが故に、其根情に合はざるものを迎へず、自然商賣の實際、秘事に遠ざかるの傾きあるが故、昨年の簿記方は今年の簿記方にして、其身に固有の習僻の外に踐み出して學ぶとをせず、身は商家の店頭に在るも、依然たる是れ學生にして、今年もまた來年も、其又來年も、同く商家の月給取りたるを免がれず。一部局の習僻に執着して他お變通轉用の餘地を残さざるは、抑もまた不具の人と謂ふべし。

然るに此輩の中には只だ一片の月給取りを以て満足するものみにあらず、心眞に商賣を學ぶの念慮あるもの少からずと雖も、其志あつて尙ほ且つ斯の始末あるは、蓋し其心より學者根情を抜き去りて、萬事を觀察し、又之に處せざるが爲めあり。學問の事はキマリの附きたる事あるに、商賣の事は頗る混雜を極めたり。學者の要は高尚に理を論ずるとかりと雖も、商人の職は卑事の數々に通せざれば能はず。一方は多く無形の事情にかゝられ共、一方は重みに有形の事物を取扱はざるを得ず。兩者の差異を畧言して斯くの如くなるを了せば、また以て學問を視るの眼を以て、商賣を察すべからざるを知るに足らん。故に歸商の心掛けある今の壯年士人にして、眞に商を望むの心あらば、サラリと學者の根情を一却して、商人根情を持ち、以て商賣の局部に存する雜事を學び、卑事の數々に通



容易に品物の陸揚げに關はらざる等、漫に其身を高ふして卑事に接せず。随がつて洋服を着するの紳士、來店すれば、恭しく禮をさすも、縞の羽織、唐棧の前掛けを着けたる率直の商人に、容易に寒暖の挨拶もささず。然るに件の商人却つて金満家にして商賣上手の人あり。右の紳士は今の所謂偽紳士おして、巧に算盤をはじくも、常に損のしがちある人たる等の奇談もあらん。要するに其根情の學者あるが故に、其根情に合はざるものを迎へず、自然商賣の實際、秘事は遠ざかるの傾きあるが故、昨年の簿記方は今年の簿記方にして、其身に固有の習僻の外に踐み出して學ぶとをせず、身は商家の店頭に在るも、依然たる是れ學生にして、今年もまた來年も、其又來年も、同く商家の月給取りたるを免がれず。一部局の習僻に執着して他を變通轉用の餘地を残さざるは、抑もまた不具の人と謂ふべし。

然るに此輩の中には只だ一片の月給取りを以て満足するものみにあらず、心眞に商賣を學ぶの念慮あるもの少からずと雖も、其志あつて尙ほ且つ斯の始末あるは、蓋し其心より學者根情を抜き去りて、萬事を觀察し、又之に處せざるが爲めあり。學問の事はキヤリの附きたる事あるに、商賣の事は頗る混雜を極めたり。學者の要は高尚に理を論ずるとありと雖も、商人の職は卑事の數々に通せざれば能はず。一方は多く無形の事情にかゝられ共、一方は重みに有形の事物を取扱はざるを得ず。兩者の差異を畧言して斯くの如くなるを了せば、また以て學問を視るの眼を以て、商賣を察すべからざるを知るに足らん。故に歸商の心掛けある今の壯年士人にして、眞に商を望むの心あらば、サラリと學者の根情を一却して、商人根情を持ち、以て商賣の局部に存する雜事を學び、卑事の數々に通



、以て其委曲を了せんことを勸告するものあり。

### 第 六 章

泰西商賣人が富と致し富を積むの道。

論者此に來りて、尙ほ論せんとするものは他なし。如何にして富を致さんか、如何にして財を積まんかの一事あり。去りあがら、金儲けの事は實地實際の活務にして、人其人により、時其時により、又事其事により、執る所の方向も異あると同時に、其利害もまた同トからざれば、到底筆尖の上に陳べうべきものにあらざと雖も、致富の道なり、蓄財の法ありとして據る所の主義に至つては、外内の

學者が之を論じたるも少なからず。著者は嘗てより、西國金満家の生涯を學んで、其富を致せし次第を知らんと欲し、廣く其般の書を求めて、之を通讀したる中には、我國後進の士人に示したく思ひしとも少あしとせず。今や此書を草して、此に至り、此章を起すも、著者が嘗て通讀の際に、意に留まりたる事々を記るして、讀者に望まんとする所あるが爲めあり。知らず讀者は如何なる主義によつて富を求めんとするか。

金満家の致富策も奇もあく妙もなし。

千萬金の巨富を致せし人は、定めて奇異の技能を有して、之を運用したるものと思ひの外、細かに其生涯を稽查すれば、只だ平凡ある筋道を踐みたるものあるに思ひ當るべし。即ち一片單純の一主義を擇んで、之を其身の萬進路を照らす總則と定め、往くも止まるも、一



に之により、隨時隨處之を應用して、遂に大成功を全たし、たるもの多きに似たり。廣き世間には、身に區々の才あるを恃んで、兎角逢世を易きものと覺悟して、深く謹しむ所もあく、計る所もあく、一奇計、一狡算と試るみて、ミゴト世を弄しうべしと思ふものも少あからずと雖も、一奇を策して得る所のものは、其色赫々たりとも、一時暫且の浮華に過ぎず、まともりたる偉勳大績は、守る所を定めて之を守り、十年二十年一日の如くに怠たるあき勞を續けてこそ求めうべきあれ。一新策一屑計の決して成じうる所にあらざるあり。著者私かに此説をあすと久し。先頃 Money-making Men. (致富叢談) の一書を得て、歐米金満家の富を成せし次第を詳にし、此立言の適例を得るに及べり。今や此に西國金満家の言行を叙するに當り、第一着に其説を出して、後進の士人に向ひ奇功を仕組むとを望まず。

も必かしくも寧ろ正確ある一義を守るを以て、立身百年の計となさんことを勧告するものあり。

リカードの致富策。我國にまで經濟家の名を傳へたるリカードは、倫敦株式取引場に馳騁して巨萬の財を積みし人あるが、曾つて其の富と成せし所以を人に物語りて余の錢を儲けしは世人の事變を見る大に其實に過ぐとの一事に注意せしによるといへり。故に其株式と賣買するや、相場は少しく上進すべき道理ありと知るときと、常に買ひに決せり。是れ案外ある騰貴の起りて益を得んとを信じてあり。之に反し相場は一旦引落すに會へば、即ち賣りに決せり。是れ恐慌の人の心に生じて思ひ設けざる下落の出來せんとを認めてあり。即ちリカードの致富策は人情の常理を講得し、之によつて利益を進め、損失を縮めたるに在るを知るべし。



ロスタチャイルドは日耳曼フランクフォルト銀行者の第三子にして、其始め二千磅(凡我壹萬圓)の金と以て英國に移り、忽ちにして六萬磅(凡我三十萬圓)の身代に變つて、遂に飛ぶ鳥も翼を縮むる世界の富豪とありしが、嘗つて其身の成功をサー、トーマス、フォーウエル、バックストーンに語りて曰く「余の成功は總て一ヶの確言の上にかゝれり。余嘗て曰へることあり、苟くも餘人の能くしうべき事業は何事もまた我之を能くすと。且つ余の果行の人かりしはまた余の一長所たりしあり。余の倫敦に移籍せし時、恰も東方印度會社が黄金八十万磅(凡我四百万圓)を賣るの舉あり。余は其賣場にお到りて、悉く之を買ひしめたり。然るに其際、ウエリントン侯デュロクが其金を要するを知りしゆへ、其人の手形をば多く割引にて買收せり。然るに政府よりもまた人を馳せて、政府のまた金を要する旨を告げたり。かくて政

府は其金を得たりしも、葡萄牙に送らんとして其手段を知らず。仍て余悉く其事を引請け、佛國を経て之を葡國に送りしが、此ぞ余が一生の間にあせし最良の商賣たりしありと。事の甚いた簡約にして細工の跡あきを見るべし。ロスタチャイルドはまた薄命の人とは、何事も共にせざるを以て其身の規則とせり。其説に曰く、「頗る活講利口の人にして、其足に靴を穿たざるものを見たと多かりしが、余は決して其輩と事を共にせざりしあり。其説く所、甚はだ妙あるが如くに聞ゆれども、其人の運命を情視すれば、全たく其言の如くにあらず。常に局促として身を進むる所あり。それ然り己が身にすら善をあすと能はざるもの、何を以てか余に善をあすとを望み得んや」と。金言と謂ふべし。又嘗てサー、トーマスの子息に教へて曰く、「少年よ、汝の事業に着けよ、汝の醸造事業に着けよ、終に汝は倫敦の



一大醸造家たるを得ん。若しそれ然らず、醸造家とあり、銀行者と  
なり、商賣人とあり、製造家とあらば、遠からずして新聞紙上に破  
産者の名を止むるに至らんのみと。蓋し守る所あらずんば業と成就  
し得ざるを言ふ者あり。

倫敦店賣商人の「ナポレオン」(The Napoleon of Shopkeepers) と倫敦府中  
に呼ばれたるモリソンは、同府フオア街に一大商店を建設せし人あ  
りしが、ボリリング著の「自叙言行録集」に其人の記事あり。曰く「モリ  
ソン曾て其富を致せし所以を余に語りて曰く、「余の顯榮殷富は商賣  
の秘技は、買人を見出すより、賣人を見出すに在り、もし廉價に仕  
入れをして、相當の利潤を以て満足せば、買人は……買人の金あ  
りといふ最良の買人は、招かずして自から來るとの至理を開發して、  
之を實行したるの結果あり。故に世間には廣大ある製造場を有し、

人を各地に派出して注文を求め、販賣を經せしめたるもの多きに  
拘はらず、余は其反對に出で、賣らんが爲めにてはあく、買はん  
が爲めに、人を諸方に派遣せり。もし巧みに買ふとさへうれば、最  
早賣却して利を見ざるの恐れあかりしと申せり。斯くてモリソンは  
其説に交ゆるに「利益は少あくとも巡廻の早き方が、利分の多くいて  
信用の長さより、結極は利益あり」との説を以てし、其主義を以て  
商賣を營みしが、果せる哉、倫敦府中最も廣大にして最も利潤多き  
商舖の一に列し、人其家を呼んで「店賣商人のナポレオン」と言ひ、其  
身自からもまた其名を以て稱ばれたりとあり。尙ほ其生涯を陳べん  
に、其素日耳曼ハンス府の市民に出で、兩親共スコット人にてあり  
しが、早くも前世紀の末造に倫敦に移籍せり。其始め質撲ある田舎  
の一少年にて、遙るく倫敦に徒歩し來りし時には、孤身榮々其幸



運を求むるに於て、絶へて頼るべとするものもあく、或る倉庫會社に住込み、微賤の業を事として、僅かに餉口の資給を得るに過ぎざりしなり。然りと雖も、世間の廣き豈偉器を相るの活眼家あからんや。同社の主人公トッドの慧眼は、早くも其人の勤勉正直ある資質の上に注射し、遂にモリソンを登用して、フォア街に建設せる倉庫會社の社員たらしむるに至り、其後終にトッド令嬢を娶つて其妻とせり。思ふに此に至る迄の出世は、僥倖に出でたりとも云ふべきあれ共、以後の立身榮達は、實に偶然のなす所にはあらず。其巨万の富は、其身自からの天然の智力と、其堅忍の志と、其正直の行との來したる結果にして、其商賣に身を委せし永が年月の間、モリソンの心は曾つて片時も眠りおろりたるにあらず、世間商賣の形勢、需要供給の有様等に最も聰慧ある注意を用ひ、眼中一變化と觀る毎に、

電光石火の勢と以て、忽ち之が規畫處置をあし、遂に其倉庫事業をして同業社會の第一たらしむるに及べり。歐洲大陸大騷亂の後、人口及富財の増殖せると最も迅速かりしと見て、モリソンは早くも其商賣の仕方と改むるの必要を覺り、最も高價を以て商あふの舊風を全脱して、新たに一主義を開發して、其商賣の政畧とこそせり。即ち利益を最低度に止めて資本の運轉を多々益々速やかあらしむるの主義を定めて、之を試みたるに、遂に其卸賣商業をして、速やかに同業社會に俊秀たらしむるに至れり。「利を薄くして廻轉を速やかにす」(Small profits and quick returns.)とは、即ちモリソンの常に口にせし所にして、他人の之に倣ふて、其商賣を營みし者ありしも、其先鞭の功は他の競争を却制して、長く其威徳を保たしめ、其結果たる、モリソンをして其中年の時に於て、既に一方向ならぬ巨富の身



どならしめたり。蓋棺の時には、其財産の英國にあるもの三四百万の巨額に達したるのみか、合衆國に於てもまた莫大の資産を有せり。然かも金持ち一色の人にあらず、意氣風流美術を愛し、學に富み、また考慮に富み、最も進歩せる政事家の一として國會議場に立てり。

金満家の致富策に奇もあし、妙もなし。以上記るす所は、即ち英國金満家が香もなき味もあき一片簡純の主義を活用して、遂に鉅万の富を成したる二三の例にして、後進の士人を益すると少なからず。素より人の世に處する其境遇に異あり、其才能に所長の同トからざるものあるが故、人其人により、時其時により、又事其事により、取るべき道行きも異なるべしと雖も、一ケの主義を撰擇して、畢生の進退を之れに委し、以て大に成す所あれとの一理は、壯年士人の方

に服膺すべき所のものたるを見るべし。

巨富は才の働らきに成らずして學ぶ志の功に成る。

或る英國新聞記者の言に曰く、「余嘗つて或る小宴の席に列せしとありし時、少しく文字ある人にして十萬磅(凡我五十萬圓)の富を有せし者ありしが、右は出席者六名の中にて最も貧しかりしものにて、最も富みたりといはれしものは、一生涯の間、曾つて教訓の書物と繙きたるをもあき無學無文の人にして、年々に五萬磅(凡我二十五萬圓)の収入ある人なりし。蓋し信用の自由ある英國に在つては、腦中一丁字あき人すらも、よく巨富を致しうると、凡ろ斯の如きものあり。思ふに富をつくるは一箇の技術たると詩才の天眞に出るが如くあらん。其人に非ざれば、學んで爲し難きに似たり」と。我日本の世の中に於ても、智あるものは財を得ずして貧困に苦しみ、字を知らざ



るものこそ却て人生の富貴を極めおるの機あるを見て、金儲ケの事は自然其人に備はりおるとにして企て能ふべきに非ず、金持チは生れおがらにして金持チの株あるものありとあして、自から金持チたるの望を絶つものあり。蓋し極めざるの罪にして、其結果のみを見て其原因を知らざるが爲めあり。英人リッチー言へるとあり。曰く「商人にして其収入の中に生活し、需要廣き貨物を撰んで、之と商ふに於ては、如何に痴鈍あればとて、無識あればとて、繁へざるの理はあらず。只だ其目を閉ち其口を開きて、大切に汝の商賣と守るとを要するのみ」と。思ふに奇才計畧を以て就す可からざるものは大功あり。前後の成敗に留意せず、其分と守つて他を思はず、長き歲月を通じ、務めて怠らざるもの、獨り能く非常の金満家とかりうるとあり。才子の眼光より、世の所謂金満家あるものを見れば、愚直一

途、才も亦く巧みも亦く、斯人にして彼の富あるは、幾んぞ解すべからずと思ふとならんと雖も、其富を成したるは却つて才なきが爲めどもいふべきなり。一の堅固ある志を以て、徐ろに萬事を計量したるが爲めにあらずや。彼の才子は固より萬事に抜目なく、一を聞き十を知るの働らきを以て、よく金を利すと雖も、其才に任つて之を用ひんと欲し、曾つて財を蓄ふと心掛けず、得る所あれば、尙ほ多きを求むるの念急にして、利益多き事業あるを見れば、忽ち之に着手し、また他に香ばしき話を聞けば、忽ち之に耳を傾むけ、轉つては又轉じて、其命運を試るむる中には、不確かある會社杯に加はりて、遂には全失敗を取るに終る。畢竟は功を急ぎ守るを知らず、長き年月を平均して大利を遺さんとせざるが故のみ。才なき人にして富を成したるは即ち此理あるが爲めあり。致富の事は決して



天然の技能にわらず。守るの堅志あるもの、能くし得る事なり。著者は敢て此説を以て、世間幾多の輕俊子に寄せんとするものあり。節儉の樂。法學に老けたる人にして金満家となりたるもの少なからず。バリストール、ジョン、カンペン、チイルドは元來赤貧の身にはあらず。其父より得たる資産を増益して(父は龍動セント、シェームス街に住みし富める鑄金銀匠なりし)萬金の富を積みたる其次第を稽查するに、一に節儉の功に歸せり。其父の辭世後は只だに其財を貯積することを心掛けて、日常生活の要用品すらにも容易に財を費やしたるとあり。常に金<sup>カネ</sup>卸の付きたる藍色の服を着用せしが、曾つてブラシをあてたることあり。是其ケバ<sup>カバ</sup>を取り去り其價格を減せんとを恐れてなり。又一生の間チヴァア<sup>チヴァア</sup>コートを着せしと見たる人なし。ケント及パリスに地所を有せしが、其借地人より來り訪

へどの招きを受くるとを喜び、時々訪問して、一ヶ月間も逗留し居たると屢々なりしと云ふ。蓋し其日々の生費を省いて蓄財と補くると以てあり。右はチイルドの富を積みし次第の一斑あるが、かくて巨万の富を成し、後ち之を帝室に獻納せり。法學に達せし人にしてまた年少の頃節儉の習慣を追ふて、金満家となりたるものある其中に就いても、ロールドケイ<sup>ロールドケイ</sup>ンは其始龍動カレ<sup>カレ</sup>街のベルヤード<sup>ベルヤード</sup>てふ所に下宿し居りしが一週間の下宿料として六<sup>六</sup>シリング(凡我壹圓二十錢)を拂へり。然るに當時其友たりしダ<sup>ダ</sup>ン<sup>ダン</sup><sup>ン</sup>グ及ホ<sup>ホ</sup>ールン<sup>ールン</sup>、ツ<sup>ツ</sup>リック<sup>リック</sup>の二人は、休暇の時は、チャンセ<sup>チャンセ</sup>リー<sup>リー</sup>町より程近き一小料理店に於て食事を常とし、其食料として一人に付一回七ペンス半(凡我十六錢)を拂ひたりしを考ふれば、ケイ<sup>ケイ</sup>ン<sup>ン</sup>の節約を守りしを知るべし。多年の後、ツ<sup>ツ</sup>リック<sup>リック</sup>常に人に語りて曰く、



ダンニングと余とは、女中の手當として一ペニーを與へたるに、金の價值を知りしケイヨンは、半ペニーを以て手當てにせるのみか、時には與ふると云ふ「約束」のみを與へたりと。

右は節約を守りし例にして、著者は敢て此般の節儉を學ぶ可しとて、之を記るせしにはあらずと雖も、蓄財のとは節約の功を頼まざれば能はず。儉約家と人に呼ばるゝ人々の爲す所を見れば、粗衣粗食して、一年に一度の芝居も見ず、町内の懇親會杯には絶へて出席せし例もあらず、如何にも何の樂みなく、世を渡るが如くに見ゆれ共、儉約家は金を積むを以て樂とするなり。節約家とて美人を見て之を美とせざるにはあらずと雖も、其樂の爲めに、蓄財の樂を棄つるを敢てせざるあり。其樂此にありて彼にあらずとせば、世の節約家の金の爲めに、下劣の衣食住とあし、交遊の樂をも取らず、時

々は義理知らずと迄云はるゝも意とせざるの風あるを怪しむべきにあらず。是れ世間の遊治郎が婦女の爲めに他に義理を欠くを恐れざるの心と同じきあり。思ふに節約を以て一の徳とあすに止まらず、之を一の樂とするに至つて、始めて鉅富を成し得べきか。

エドゥイン、テイ、フリードレイの「致富論」(How to Make Money)に破産の原因を論ずるの文中に、一の統計表を記るして曰く、破産の場合五十二ヶの中あて、

三十二 は無勘辨の散財を志したるに起り、

五 は一部分は前條の原因より、一部分は其商賣の切迫より起り、

十五 は無勘辨ある投機を爲せしに起れり

と。浪費の爲めに産を傾むくるの不幸ある右の數に記るすが如くに



大  
其  
の  
人

して、殊に少壯の士人にとりては最も陥り易き流弊あるが故に、深く自から戒しめて其不幸を脱するを心掛くべきあり。人は昔時の日本商人が質素の風と尤めて之を非とするに過ぎて、今日の所謂文明風の商人あるものには、既に驕奢に走るの風あるを見るに至れり。雖も、著者は却つて舊風の商人の質素ある氣風を賞揚して、商人特有の美質たるを信するものあり。國を奢侈の敗俗中に陥るを制して、節約の風を大に世に流行せしめて、國の富財の量を増さんことを望んで已まざるものあり。

之を要するに、著者は敢て節約主義を以て今の少壯士人に勧め、以て大に財を蓄へんことを望むに外ならず。嘗て安南國に存する貯金の奇習ありと云ふと聞くに、「前きの安南國の王宮中には一の大ある池あり。其池は安南王の非常準備金を貯蓄し置く所にして、王は木の

幹をッリ抜き、一種の金箱を製し、其中に財貨を封入して、水中に投下置き、是非に之を要する時の外は、之を水外に引出すとあし。然れ共唯だッリ抜き箱に財貨を収めて、水底に沈めをけるのみにては、盜難を避くる能はず。且つは國王自身と雖も、漫に之を引出すの恐あきにもあらずとて、水溜の中には、鱒魚を養ひ置きて之が備へとあす。蓋し斯くあしかく時は、何人と雖も鱒魚の腹中に葬むらるゝの危険を恐れ、敢て水に入るとをあさず。随つて貯金の毫も減少すべき患あきが爲めにして、國庫空乏を告げ、此非常準備金を引出すの必要切迫するに於ては、國王の認可と大藏省の同意とを経て、先づ水中の鱒魚を殺し盡し、然る後ち始めて夫の準備金を引出し得るなりと云ふ。囊中の錢は之を散するに何の恐れもあさしくあれ共、之を散するの結果を想像すれば、また鱒魚に吞まるゝの危き



に劣らざるの危難を身に招くにあらずや。無益に百金を散せば、百金丈けは其身を食ふあり。一旦手に入れし金は、容易に之を出さざると務むると、安南王の非常準備金に於けるが如くにして、始めて蓄財の事と全くしうべきあり。

生費の區域を小にして商賣の區域を大にす。

英國の金満家ブラッッセイが鉅富を積み次第を探ぐるに、二箇の事情に因れりと云ふ。即ち一は其生費の區域を小頼に限りたることにし、總ての虚飾外見驕奢を排却し、恰好ある一小店舗を持ちたりしが、其後富財の増加せるも、之を取擴ぐるとはせずして、依然質素に暮しけり。常に人に語りて曰く、之れと云ふ事業も亦く、正當に二十四時間を費消するは、中々に難くして、殊に其稽古を亦すと要す。セントルメンの世渡りを亦すには、元來セントルメン風に生長

せざるべからず。去れば永の年月商事に身を委せし人にあつては、隱居遁世を亦すと能はずして、もし然かすれば忽ちに誤りを亦したるを覺りぬべし。故に余は世を退くをせざるべし。若し何等かの譯け次第ありて然かするを免かれずんば、人の亦す如く、徒だに團茶抹茶を事とせずして、農を事とすべし。以て農耕貨殖して、日に其増殖を計算すると同時に、其日々の諸入費を取調べ、彼此を比算して其餘を計り、而して時機を見て其貨を賣り、又來春の農事を工夫するを以て我樂しみと亦さんのみと。而してブラッッセイが鉅富を致せし第二の尙ほ主要なる原因と云ふは、其商賣の區域を廣ふしたるにあり。其友人の言に有之、ブラッッセイは誰もの如く金の價值を知り、壹磅の金は如何に勢力あるやを知りたりと雖も、去りどて富を得るに決して吝嗇あらず、商利を致すが爲めに助けとありし人々に



は、其利分の一部を割いて、之を與ふるを常とせしが、其額甚だ多かりし。去れば其運用したる資金に對し、三分以上の利益を收得したる事は、曾てなく、其餘は悉く之を他人に與へたりし故に、人其爲めに資を貸すとを喜びしを以て、其事業に運用せし七千八百萬磅の金は、皆他人の資財ありしが、ブラッッセイは之を運用して、公に利し、自からもまたそれより二百五十萬磅の大利を博せり。而してブラッッセイの財政處分策は甚だ簡約にして、勘定の事は之を金銀出納方に一任して、敢て自から關せざりしと云へり。然ればブラッッセイが致富の道は、勤儉以て其生費の區域を狭ふし、一方に於ては、散す可きには散トて、其商賣の區域を廣ふしたるにあるを知るべし。冗費を避けて用を節し、有用の道に多金を散トて、商賣繁昌の爲めにす。金錢の聚散能く其節に適したるものにして、著者の偏に學

ばんとする所のものあり。

アヂソンの名言。倫敦の紳商アヂソンは、海を呼んで英國の公有地ありと云ひし人あるが、よく貿易の委曲に通じ、天下の權力は技術産業を以て得べきものを、戎軒を以て領地を擴げんとするは、策の迂るものあり、野あるものありとて、屢々海上貿易の擴張を説けり。見識の高きを見るべし。且つ言へるとあり、「勤勉は勇氣よりも永遠に續くアツクイシジョンの所得を來す。……遅慢は劍よりも多く國の零落を招けり」也。また勤儉の格言を遺したるを多きが中にも、「節省したる一ペニーは、儲けたる一ペニーあり」との諺の如きは、最も人口に膾炙して、千萬年の名言たり。余はア氏の高風を敬慕して已ます。金持ちの史家。金満家の中には、唯だ一片の金持チを以て、世を渡るものあれ共、また其聚めたる財を散トて有益に用ひ、金の光



りを輝かすキの少あからず。金満家にして歴史家たりしジョージ・グロートの事を記るして、其一例とせんに、其祖父は素と曼國ブレメン府の産にして、英國に移住し、千七百六十六年一月一日グロート、ブレスコット商會の名を以て、一の銀行を建設せしが、グロートの十六年ありけるとき、倫敦スレッドニードル町にありし同銀行に歸身し、此に始めて商の生活を打開さしが、其後三十二年の間、其事務に執掌し、充分に財を積み得て、其位地を退き、餘生と其富とを、歴史學の研究に委ねたりしが、スレッドニードル町にある其家宅には、ミル父子、ダビッド、リカード、國會議員ジョン・スミス、モートン、グロニコル新聞記者ドクトル、ブラッダ、チャールズ、オウズチン等、當時知名の學士多く來遊して、一箇の文苑たりしと云ふ。

金満家の心事甚だ密あり。金満家とありぬる人は、總べて萬事

に援目なく、物を恵む折に於ても、金を益するの工夫と忘れず。サ、マッセイ、ロープスは巨富を積みし人あるが、或る時一人の來りて非常の不幸困厄に會せる由を告げ、且つ二百磅(凡我千圓)を得ば、其苦境を免がるべき旨を語りて、其恵を乞へる者あり。ロープスは之を承知して、其金額丈けの爲替手形をつくりて之を與へ、且つ貴兄には之を以て如何にあさるとにやと問へり。件の一人は銀行に到りて現金に引換へんと思ふと答へしに、ロープスは待たれよ、去らば拙者が現金に引換へて差上ぐべしとて、其金額に對する割引と計算し、之れを引去りたる殘金を渡せりと云ふ。即ち一時に仁惠と商賣とを爲したる者にして、固より好ましき事例にはあらざれ共、また以て金満家の心事甚だ密にして、金と儲くるの注意甚だ至れるを見るべきか。



世俗の未だ發見せず、空しく埋没し居る大利を發掘したる魯國の一長者。一國或は一地方にて拔群の富を致す者は、皆な何か常に異りたる行を以て身と起すが多し。魯國にて有名ある富人にて、世界中の長者鑑にも列するクロン氏と云へるは、此頃己れの蓄財を携へて佛國巴里に移住し、茲にて其餘年を樂むとに決意せりとて、巴里の諸新聞には其評判頗る喧すし。氏は本と露國の都聖彼得堡の仕立屋の手代ありしが、或る年聖彼得堡にて疫病流行して、其爲めに命を殞すもの幾千と云ふを知らず。専門の醫家は勿論、諸派の學者相集まりて、頻りお其救治法を求むれ共、隨つて療すれば隨つて蔓こり、病勢中々に熾んにして、今は殆ど術の施すべきなきの有様とあり。此時氏は未だ尙ほ年少ある裁縫職人ありしが、不圖心附きたる所ありて、一日某新聞に寄書し、此疫病の原因は全く府下一般の

飲水の不良あるありとの旨を痛論せり。蓋し當時聖彼得堡の飲水は皆チハ河の流を引けるものありしが、また一方にて府下の暗渠は總て同じくチハ河に吐出す仕組なりしかば、取も直さず、府下の人民は皆暗渠の汚物の混合水を飲み居たる譯ありき。流石の學者仲間にも、一人として此に心づける者あらざりし折柄あれば、此裁縫職人の寄書は、魯國の智識世界に大警策を與へ、之を讀みたる時の帝ニコラスは、直ちに勅を下して、何程の費用を要するとも、速かお飲水改良の事を取計ふべしと命ぜり。命を奉せる工部省の土木師は直ちに之を試みたれ共、成功する能はず。帝は怒て之を柴伯亞に配流し、更らに土木師と易へて、之を成さしめたれ共、亦成功する能はず。再び之を柴伯亞に配流し、又第三の土木師に命ぜり。第三の土木師は成功に至らざりし而已ならず、此事は到底爲し得べからさ



るとありと復命せり。是に於て彼の寄書の起草者あるシロン氏を召し出たせり。氏は直ちに兼ねて考へ居たる方案に従ひ、會社を組み、其工夫を施したるに、着々功を奏して、遂に全く飲水改良の事を大成するに至れり。因て帝は大に其功を嘉みし、賞金五百萬圓を賜ひ、皇后は手づから筆を染めて、褒美の辭を贈れり。此改良飲水會社は斯る榮譽を荷へる上に、其業の素より有利の者なりしかば、氏の資産は其名聲と共に隆興し、今は五千萬圓以上の長者ありと云ふ。余輩西洋富人長者の傳を讀むに、皆斯る類にして、世俗か未だ發見し得ず、空しく埋没し居る大利をば、己れ先づ發見發掘して、人をも益し、併せて身をも潤ほすと云ふが多し。投機の小術を以て、唯だ浮きたる金を儲け、手堅き富を致せる者は、未だ多く見ざるあり。郵便報知新聞

アストルの立身。紐育の名と共に、其名を紐育の史中に残したるジョン・ジャコブ・アストルは、素と曼國の一小村ウアルドルフに生れしが、其二十歳ありける時は、恰かも米國獨立の戦争が、其終りを告げたるの時ありければ、早くも新世界に渡りて、幸運と求むべしとの念慮を起し、赤貧の一少年の身を以て、其住家より徒歩しつゝ、其乗船すべき海港へ往めり。此時に際たり、アストルの有する所のものとは、一ケの小包と、下等の乗船切符を買ひうる丈の金子のみの外、一物も亦く、米國に上陸の時には、一文あしの身あるを期すらく、住み慣れし故郷の山河を後に見て、之に最終の別を残し、途中一樹の下に立ち、三ケの決心をなせり。曰く「余は實直なるべし」余は勤勉あるべし「余は決して投機を試みざるべし」と。かく其前途を誓ひたりしが、死せるの日迄、此決心を破らざりしあり。



かくて倫敦より米國に向け發途せしは、千七百八十三年のとしして、船上或る毛皮細工人と懇意にありしが、是ぞアストルが他日萬金と益せし其商賣に就くを得し端緒となりしあり。倫敦に在る其兄の製造所より持ち來りし七箇の笛を賣却し、其代金を以て、毛皮を仕入れぬ。かくて節約を守り、事に勤勉し、終年怠たらず、遂に富貴の身となりしが、年老ひて後、常に語りて曰く、「余が富を致すの途に於て、只だ至難なりし歩は最初の壹千弗を積むとにてありしと。」

米國毛皮會社を建設して、遂に五十萬弗の資産を積みたり。  
 ハーパーが成業の活經歷。書籍の出版に關する諸般の事務をば、悉く自家の一手にて經營し、世界中最大の出版家たりとの評高き、紐育のハーパーが成業の跡を探查するに、余をして自から快を覺へしむるものあり。ジェームス、ハーパーが印刷家とあらんとて、愛蘭

土ラング島の郷里を立ち出でしは、千八百十年のとしして、紐育の或る出版家に住込み、卑賤の業を手掛けて、苦業の間に、日を過しぬ。其當時、今のハーパーの出版舎のあるフランクリン、スクウェアは、紳士富人の住居に満ちたりしかば、赤貧洗ふが如きハーパーの容姿は、出入共に、人の着目を惹きて、不快ある嘲罵の數々に會せり。其故郷にて製りたる衣裳は、品質の粗惡あるのみならず、仕立方もまた不意氣かりしかば、市井無頼の少年、來往指辱輕侮して云へらく、「御身の衣裳は巴里より來りしか御身の仕立屋へ照會の名刺を與へよ」御身の母君は其幅廣羅紗一ヤード何程に買ひしにやと。動もすれば、益々其無禮を増長して、ハーパーの身邊に近付き、陽に衣服の美を稱し、肩背を撫するまねして、其身を捻り坏するとも度々なりしが、不快至極の苦境に立ちしハーパーの堅忍ある、其小憤には怒



らざるべしと決意したる心の中ころ殊勝あれ。一日下女仕事をあし  
 たりしとき、例の如く、無頼少年が來りて、其名刺を與へよと求め  
 した、ハーパーは自若として、其人の方に振り向き、其携へおりし  
 手桶の上に、熟慮せる如き容姿を以て除るに腰をかき、劇然其者を  
 一蹴し、且つ曰く是ぞ余が名刺あり。それをばよく注意せよ。余が  
 余の奉公年限を畢り、自から業を營むの日に於て、郷もし職業に有  
 りつくを、求めば、余の所に來れ。余は郷に業を授くべしと。然る  
 に四十一年の未來に於て、ハーパーの家名が、全米を通じて聞へけ  
 るとき、紐育金満家の一とありしとき、件の名刺を受けたりし人が、  
 ハーパーの店舗に來り、告ぐるに、四十一年前にもらひたりし名  
 刺を今迄所持したりとの事を以てして、業を求めけりといふ。ハ  
 ーパーの右の如き名刺を與へて、之を以て他日來れと命せるは、去

るとながら、之を與へられしものに於ても、四十一年の長日月間、  
 心に之を仕舞おきたりとは、偶然にしかせしものならんにもせよ、  
 また一奇にあらずや。  
 「紐育、ヘラルド」の創設者、ベンチットの事業。 「紐育、ヘラルド」の創設  
 者として、有名あるシェームス、ベンチットは素スコットランドの産  
 あり。十五歳迄は小學校に學びしが、其兩親は其子をして、法教師  
 の職を執らしめんとを望み、全國アベルデン府の羅馬舊教學舎に入  
 學せしめり。然るにベンチットは三年間其學事を續けたりしが、深  
 くベンジャミン、フランクリンの本國たる米國に遊ぶの熱望を起し、其  
 學事を打棄て、千八百十九年遂に米國に上陸せり。メイン州ボル  
 トランド港に於て自から教師とありて學校を開き、以後ボストン府  
 に移居し、其力の能ふ丈けを盡して、フランクリンの故事を尋究し、



周ねく革命戦争の遺物を探查し、また大英國との戦争に著名なりし場所へを訪ふて、自から樂しむ所ありしも、身貧ふて思ふ所を爲すを得ざりし。既にしてポストン府に於て、原稿校正員の職に有りつき、詩文の筆者としての才力を表せり。千八百二十二年紐育に移り、直ちに新聞事業に關係せしが、始めの程は面白からぬ仕事と務めたりしも、持ち込まるゝ事は、何呉れどあく之を爲し、勤勉、沈着、節約にして、巧みに事を處し、著るしき才力を示せり。かくて幾何もあくしてチャールレストン、ソーリアー(新聞)に入社し其西米新聞の翻譯者とあり、又同新聞の爲めに、其詩才を運用して大に盡す所あり。千八百二十五年紐育ソーリアー(新聞)を買取りて其持主とあり。同新聞は日曜日刊行のものありしが、成功あらざりしにより、千八百二十六年共和黨の機關新聞たるナショナル、アドヴァンティの

記者とされり。同社を辭してインクワイアリーの記者となりしが、國會の開會中は恰かもベンチットの同新聞の社説を引きうけおる時ありしかば、ソーリアーとインクワイアリーとの間に一致聯合を結べり。然るに其後銀行の事に關し、他の記者と意見を異にし、同新聞を退ぞけり。當時ベンチットは紐育の新聞に其注意を轉射し、其大に時に晩れたるを見て、主府の新聞として恥かしからぬ一の好新聞を刊行するの意を決せり。去りながら其身には一の資本あきあり。富める友人の其後に助くるあきあり。只だ其勇氣と、才力と、不動の決心との外は、他に何物も頼む所はなかりしなり。千八百三十六年五月六日には、紐育ヘラルド遂に世に出でたり。小さある一片新聞たりしなり。ベンチットは記者あり、探報者あり、又通信員にして自から市中の新出來事を集め、貨幣欄内を筆しぬ。而して其紙



上の理財上の記事を以て同新聞の特質とせんことを決せり。身賣ありしも負債をささず。又株式の事に關せざりしかば、其賣方にも買方にも、絶へて利害の關係を有せず。其意の好むまゝに銀行者も株式仲買人かも筆難するを得たりしなり。早朝に起き出で、出精して働らけり。謹み深くして節約に暮らしたり。只だ新聞あるを知つて其身あるを知らざるが如くに見へたり。自から活字の組み方とあり、小使とあり、撮報者となり、其新聞を郵送するものどもあり、又其勘定方ともありて、かくて遂に其富を成したり。

紐育へラルドの大理石の堂宇は世界中最も完備せる新聞社の建物として知られたりしが、其未だ落成に至らざる以前、ベンチットが國立銀行に向つて手ヒドキ攻撃を加へつゝある時に當り、一國立銀行の頭取はベンチットを訪ふて「ベンチット君、此手廣き商賣を行ふ外

に、此建物を建設するには莫大の費用を要すると、推しおれり。兄若し金子の融通を望み候は、拙者方の銀行にて御用達申さんと云へるに、ベンチットは答ふるに以下の言を以てせり。

「余は此建築を始むる以前にケミカル銀行に二十五萬弗の預金をあしかきしあり。ヘラルドの建物の上には壹弗たりとも余の仕拂へぬ負債とはあきあり。建物の落成する時には我をして仕拂はしめば、何人にも一弗の負債をも爲さざるべし。余は一時間内に償却しぬものは何物も負はざるあり。余は銀行に托しある預金には、未だ壹弗も手を附けたるをさし。其金の存在する間、曾つて他の融通に依頼するの要なく候。」

而して其新聞の聲價を博せしは、其記事をして世界中最良のものたらしむるを務めたるに因ると多きあり。格別に要用ある新報道に接



すれば、直段の嫌ひなく其種子を買取りしが故あり。曾つてヨーロッパ(多くの汽船を有し、盛に海運の業を経せし人あるが、ヴァンダールベルトの爲めに競ひ敗られて破産せり)の汽船が沈没せし報道の紐育に達せしとき、其報道を齎らし來りしものは、第一にヘラルド社に來りしが、時既に土曜日の夜なりし。ベンチットは之に其望む所の直段を拂へり。去れ共其報道者をば饗應して、其社中に留めおき、紐育の全府を通つて、日曜日の朝刷の附録を散布し終りたる後を待つて、始めて其者を社外に出せりといふ。右は其記事の他に勝るを務むる一例なれ共、ヘラルドの通信者は、世界の東西に散滿して、新出來事を電報、郵報するの至れるは、即ち紐育ヘラルドをして、紐育ヘラルドたらしむる所以あるあり。

觀世物師のハルナム。「紐育繁昌記」中に、其偉人の一ありと記るさ

れしフィニス、テイロル、バルナムは、素とコンチクチカット州のベセルに生れたりしが、氣風快活頗る諧謔を好めり。十九歳にして妻を娶りヘラルド、チフ、フリードム(自由新聞)の記者とあり、勇壯ある議論を筆して、大に其名聲を博したりしか、或る時官吏の劇評を筆して、爲めに囹圄に呻吟するの不幸に會へり。其出獄の日には、知己友人大勢をつくり、旗を押立て、樂を奏し、馬車を以て之を其途に迎へり。爾來筆硯を投じて觀世物師とあり、スカッターの亞米利加博物館を月賦を以て買受け、チャイレス、エス、ストレットンと呼ばれし有名の一才法師の觀世物を出し、次で名高き手品師シエンニー、リンド嬢を、毎夜千弗宛の約束にて雇入れ、百五十日間の興業をなせしに、意外に當りをとりて、莫大の利益を得たり。其數多かる觀世物の中には、世間より之はゴマカシ物あり杯として、種々の評判をうけし



ものあり。就中毛馬、人魚、狸々等は最も著名のものなりしが、バルナムは如何にも左様ありとて一向頓着する色も無く、云へるには、「右様特別の観物の外に、尙ほ幾多の観物あるなり。數多なる、珍物、奇物、大男、一寸法師は申すに及ばず、他所の觀世物には曾つてなき、愉快ある音樂の合奏あり、珍獸奇鳥に充てる動物園ありて、千百様々なる娛樂を興ふれを、我博物館を見物する人は、木戸錢に十倍せる面白サを見うるあり」と。或る時大なる赤色の狒と觀世物にしたりしが、バルナムは之を米國に一疋キリの狸々ありとて、頻りに其廣告を散布せり。然るにバルナムの手代等は巧に新聞記者をゴマカして、其雜報中に恐ろしき狸々の話ありとて、其勇猛の有様を様々に記るし、かつて船より博物館迄、件の狸々を持ち來りし人々をば、片れくみ引きさかんとせしとありとて、其怒りし時はかく迄に

劇し、其強きとはかく迄に恐ろしとて、色々に書き立てしめしより、奇を好む人情の常として、吾れもくくと見物にゆくものひきまきらず。然る處バルナムは實は其動物を未だ見ざりしがゆへに、ポスト新聞に出でし其記事を見て、心痛の餘、直ちに人を其手代の許に馳せて、人の害を受けざる様、注意すべき旨を告げり。山あす見物人の中に一人の博物學士あり。能く件の動物と檢視したる後、バルナムに面會を求め、「新聞紙上にて恐ろしき狸々の記事を見たるゆへ、それを見ばやとて參場せり」どの由を告げ、且つ云へる様、「あれは狒の見本には甚はだ好けれ共、狸々にてはあらぬあり。バルナム「あれが狸々でなき譯は何で御座る」博物學士「去ればサ、通例の狸々は尾あきものなれば、」バルナム「余も通例の狸々は尾あきものなるを知りおれり。然るに此狸々に限り尾を有てるこそ、此觀世物のめづらしき所



以にして、余が米國無雙の猩々なりと廣告せしも、全くこれが爲めありとの大膽不敵の答辨に、サスカの博物學者も舌を巻いて立ち去りぬ。……世間バルナムを評する者或は曰く、「バルナムは山師あり。彼が富財は大袈裟ある繪看板と、法螺八百の新聞廣告より造り出せしものに過ぎず」とて、指彈させし人もありしが、固よりバルナムが心を知らざるもの、言にして、バルナムが成業の秘義は他に之ありしあり。事業を経するの氣力、熟練あり、堅忍不拔の志あり、利害を知るの明あり、又勤勉の質ありしは、是れ則ち其業を就さしめたる所以にして、此數のものなく、只だ浮きたる術策のみにては、イカテ功を成し得んや。バルナムは全く正直の人たりしあり。商業上の約束は常に約束せし通りに守りしあり。且つ自己の爲めを計りくれし人には、惜氣なく報酬を與ふを規則とせり。去れ共節儉

を務めて怠たらざりしが、妻の某もまた勤儉家にて、良人より年々家事入費として渡したる六百弗をば、常に四百弗に節減せりと云ふ。……件の博物館を買受けしより六ヶ月後に前きの館主が縦覽券賣捌所に来り、時偶々正午にして、バルナムの粗末ある辨當を其前にどりひろげ喫し居ると見て、云へらく、「君はいつもこんな趣向で、晝食をささるのか。バルナム如何にも。拙者は此博物館を買受けて以來、大祭日の外は、未だ温たゝか晝食を遺ふたとはあし。拙者は此博物館を我物にして、スツカリ借金を拂ひきる迄は、何時までも此食事を改めざる覺悟あり。前館主「オー、うれでこそ大丈夫あれ。此年の暮迄には、此博物館も君のものになるとあらんとて、立ち別れしが、其後一年あらずして、件の博覽會場は全くバルナムの所有に移れり。讀者は尙ほ第七章の中に於て、件のバルナムが成業



の規則ありとして、陳べし所のものを見るべし。  
 ステウアートの決行。其生前世界第一の富豪と呼ばれしアレキサンダー、ステウアートのは、素と愛蘭土の産にして、少ふして紐育に至り、其故郷の親戚より附與されし、些少の金を資本として、見る影もなき一小商舗を開きしが、身は一にして、使小僧ともなり、店番ともあり、帳面方ともあり、賣子ともありて、働らくと、十四時頃から十八時間に及んで倦まず。其店の樓上を以て、其住居とあしたりしが、一時は一室を臺所にも、寐床にも、座敷にも用いたりし程に用を節して、他日の爲めにせり。然のみならず、ステウアートが商賣を始めける頃には、未だ信用の道起らずして、銀行も只だ僅かの助けを與へたりし時なりければ、ステウアートの如き薄資のものにあつては、何かに付けて、不便多かりしが、一日右の小舗にありて、

商賣を營みをりしに、一の約束手形の期日になりしものを持参して、仕拂ひを請求に來りしものあり。然るに折あしく、手許に之を拂ひうる金あらざれば、銀行に付き、又知友に付き、金を借らんとせしも、一人として應ずる者なく、一時は途方に暮れたりしが、ステウアートは其手形を不拂とあさざるべしと決心して、勇ましき舉動を以て、其困難を切り抜けたり。即ち其店にありとあらゆる品物に元價より以下の安直を附し、大安賣の引札を作りて、之を紐育の全市中に散布したりしかば、商家の店頭に、漁船の甲板に、旅館の入口に、馬車の内側に、總て至る所に其廣告を以て散滿たり。かへりしかば、ステウアートの店前には忽ちに人の山を築くに至れり。此に於てかステウアートは聳然として群集の中に立ち、言を少くして、其品物を差出して、現金を取り入れり。而して其直段をねぎ



るものあれば、徐ろに其品物の上包みの上に明記しある價格に指さして、其まからざるを示せり。食事する時さへかく、又眠る時さへあき程に繁忙ありしなり。吾もくゝと續々來りて買ひ去れり。買つて歸りしものは、安き品物を買ひたりしを喜べり。かくて、引札に記るせし賣仕舞日の來らざる以前に、早くも其店中の在荷を捌き盡して、種々ある品物は、今は現金に變つたりぬ。面倒なる手形は仕拂はれたりしあり。多額の殘金を止めたりしあり。爾來ステウアートは掛ケを以て、取引をせざるべしと決心せり。市場の沈靜を呈し、不景氣を極め、現金の切迫を告ぐる時あらば、最良の品物をば、自分の附直通りにて買取りぬ。かくてステウアートは身の好運の基礎をつくり、遂に三千萬弗の鉅富を積みたり。

以上記るす所は、泰西金満家が致富の道と、例によつて示したる迄

のどにして、尙ほ餘のものを輯すれば、別に一冊をなすと雖も、暫らく以上を以て満足して、本書の局を結ばざるべからず。他日其時あらば、以餘を拾遺して、世に公にするともあるべし。讀者其一斑を示して全豹を録せざるを、咎めたまわすば、幸甚あり。

第 七 章。

讀者に告別の辭。

日本の富は日本人民の希望を満足するに足らざるが故、後來の日本は其不足を感じて、富を求むるに急あるの時世たるべきに、第壹章に之を述べ、次で此日本が富を求むるの工風としては、世界の江州



商人とあり、以て盛に轉漕業キョウコウギョウを行ふにわれ共、今の商人には到底其事を望むべからず。然るも今日に於て、今の學者と商人とが、互ひに相寄り相接せんとするに至りしは、是他日我商人世界に一改良を與ふるの原たるべく、後進の士人、後來の日本世界は商の天地たることを知つて、深く此點に着眼し、以て當世に處する所あるべしとの旨を、第二章に記るし、第三章には、商の生活を送らんとする人々の脩むべき藝能を説き、第四章に至つて、其人々が身を處するの心得として、戒しむべきの科目、數ヶ條を陳じ、第五章に於ては、書生の歸商に伴ふの通弊を筆して、其人々の注意を乞へり。かくて其次に言ふべきは、如何にして富を致さんかの一義われ共、金儲ケの道は、かくくありとて、定まりし規則のなきもの故に、西國の金満家が富を致せし諸般の例を擧げて、其一斑を示せり。即ち前章の

讀者は、例によつて、富を致すの道は、零は斯くあるべきを學びたるとあらん。然れば、著者は最早讀者に別かるゝの場所に進すみたるものなれ共、尙ほ此際に於て、言ひおきたしと思ふ所のものなきにあらず。讀者は之を著者が告別の辭として、讀まれんことを望む。錢の神にあらずとはいへ、世の中に神あることを知らざる者迄もが、拜する所の神は、即ち錢にあらずや。古來我國の論者は、錢の事は卑賤の事ありとして、之を度外に置きたりと雖も、浮世の外に立つものゝ外は、生れてより死に至る迄、一日として錢の關係を脱する能はず。去れば錢の事を巧みにすると否とは、一生涯の損得に關する甚はだ大なるとは、浮世の實際に明らかにして、有形の錢の有無の爲めに、無形の徳の高卑を來すとまた少あからず。即ち古聖人の申す衣食足つて禮節を知るとは、其邊の意味にして、多錢よく買ふ



今日の世の中に於ては、金銭學は最も尊重すべき學問の一として見るべし。日本の後來は、拜金拜錢の世の中ありとせば、今の士人たるもの、詩を作るよりは、金をつくるの工夫を、先にせざるべからず。かくて一人くが財を積むの結果は、一國が富を致すの道にして、日本の富國強兵を口にせば、先づ其一身より、金持ちとなるを務めよ。徒に奇説を陳べ大論を吐きたればとて、一國の富強は増さず。余は今の世の空言家、大論家、或る意味に於ての有志家ある者等に向つて、早く其事を止めて、素人しよととあり、金儲ケの途に就かんことを望むものあり。金儲ケの事を以て、漫に下賤の事とあす勿れ。一國の富は、一人くの富の集まりし結果にあらざや。錢の事を大切にすれば、兩様の道より、國の富昌を來すの力とあるをかり。甲は金銭と種々の奢侈の用に散するに、乙は之を貯へて、

銀行、鐵道等の株券と買求むる方に向くるとせんか。甲の如き、其金銭をば、皆あ之を無用の道に散する者のみ集まつて、一國を成さば、其國の財本は、貨殖の途に入らずして、不生産の資本に變ト、結極、國の零落と來すに終るにひきかへ、乙の如く、其身の餘財を舉げて、之を世間有利の事業に放下するに於ては、其積もり積もりたる處にては、則ち一國社會を富ますべき生産事業の資本とありぬべし。又一方より云へば、甲が一身の娛樂の爲めに、奢侈をあし、爲めに錢の切迫を告げて、種々に錢の苦勞をあすの心思は、乙に於ては、轉じて、其身の立身榮達を企圖するに用ゆるあり。故に一己一己が錢の事を大切にすれば、一國の有利資本を加ふる正面の利益とあるのみならず、一己くが其身を榮進して、國民の富昌を増すの側面の大利ともあるを知るべし。國人一己くが、錢の事を



謹むの有様如何は、一國の盛衰を左右する原因の一たるを知らば、軽く治國の大論を唱ふる、今の所謂有志者等は、深く己を省みて、身の錢の有様を思はざるべからず。眞に國の繁榮を企圖するの心あらば、彼と此との前後本末を察して、世に處する所ありたきなり。致富の術は、甚いた簡あり。別に入組みたるものにあらず。もし百圓の收入あるに、九十九圓を以て、費用とせば、生涯、錢の事に困しむのとあるべからざるは勿論、年月の過ぐる中には、相應の身代となるを得べし。かくて多少の資本を得たらば、之を投機の事杯に放下すべからず。投機は奇利を來すが如くに見ゆれ共、之によつて鉅富を成したるものは少し。多くは爲めに其身の零落を招きたるを見る。煎する所、致富の事は、至極簡にして、平常の道行きを以て、出來べきものあり。事に例へて途を行くものゝ如きか。其思

ふ所に達せんことを急ぐの餘、徑路を取りて往まば、百中の一二は奇功を奏せざるには限らずと雖も、徑路は迷ひ易きあり。危険多きあり。危険多き割合には功績少きなり。もどかしくも、坦夷ある大道を擇び、一日に行くべきの路程を定めて、終始怠たらず、往まば、或る時限には、遂に其思ふ所に達して、まどまりたる大功を續するを得べし。讀者もし之を疑はば、古來鉅富を積みし人々の生涯を細査しよ。余の讀者を欺かざるに思ひ當るべし。

死せる時は萬金の富を有せし人も、少年たりし頃は一文あしの身分にてありしといふ其人々に向ひ、如何にして其富を成せしやと問ふものあらば、左の如き答辭を得ると、少なからざるべし。

「余の父は、余が其日々の仕事を總て仕遂げ畢る迄は、遊ぶべからずと余に教へにき。金を儲けたる上からでは、之を費やすべか



らずと訓へにき。一日の中に尙ほ爲すべき半時間の仕事あるときは、其事を第一の要務として、之を其半時間に仕遂げざるべからず。之を爲したる後に、始めて遊ぶとを得たりしなり。余は年少の頃よりして、總ての事を、其事を爲すべき時に、爲すに慣れしが故、習ひ性とありて、然かするとは、何の苦も感せざりしあり。余が身の榮進は、蓋し此習慣の造り出せし産物あり。」

人情の常として、事に當り、困難を預想し、爲めに事の澁滯を來すと多しと雖も、此常情に動かされざるを務め、困難を預想するの心思を轉じて、直ち其事を規畫するに用ひば、事の運びは思の外に易くして、知らずくの間成功を見るべし。去れを、今日此丈けの事を成さんと極めたらば、直ちに其事にとりかかり、其仕遂げ終るを期すべし。然るを途中の小困難にあぐみはて、尙ほ困難を預想

して、此は明日の事なりとて、漸次延引するともあらば、一日に見れを、一日に成すべかりしとを成し遂げざりし譯かれ共、其結果は、此一年に成すべしと企てたりし事業を、其年中に果さざるに歸すべし。一年に成すべく思ひし事を、來年に送るの結果は、人の望みし一生の事業をして、其企てし所に達せしめず、慊恨を抱ひて、目を閉るの不幸に終るあり。万事を其事をあすに充てたる時間内に仕遂るの一事は、人間一生の事業をして大ならしむる所以の道なることを知れ。

甲は曰ふ、「人間万事總て時運に據るのみ。時運の外は何事もあらざるあり。余は時々好運への楷梯を一段、二段と上ることを務めたりしが、常に久しきを經ずして、降り下がれり。既に然り、今やあせり上ることを廢めたり。何となれば、時運は余と友あらずして、余の



反對に立てばありと。乙は曰ふ、「否、然らざるとよ。計謀の功程、時運の功は多からず。私利に汲々として其工夫に怠たりなきものは、上りゆくあり。正直ある人々は、常に下に止まるありと。丙は曰ふ、「万事總て引立テのなす所あり。汝は其手を以て汝と導き、汝を助け上ぐる或る恩人を有たざるべからず。然らずば、汝はまた一の幸運に接ふの機會なきありと。かく人は各其説を異にして、一は時運を頼み、一は計謀を頼み、一は引立テを頼みて、それそれ處する所ある中に、此等の事柄には毫も留意せず、己れ自からを信任して、間斷なく上に進みゆくを続けおるものは、年月を積みて、遂に其階梯を上りつくして、榮華を身に集むるを得べし。蓋し大功を我に持來すものは、頼み少なき時運にあらず、計謀に富饒ある才氣にあらず、他より受くる引立テにあらず。只だ己れの身力に依頼して、

終始ゆるみなく、前に進みゆく不撓の志業なり。ブリードレイ言へるとあり、「余が一生涯の中に觀察せし所にては、少なくも、偉功を續せし人の十中の九は、己れ自からの頭腦と手腕との外は、頼む所のものなくして、世途に躩み出でたる人ありと。紐育の商王スチュアートは曰く、「如何に俊秀ある才力も、熱したる勞苦と、飽きざる勉強とを以てするにあらざれば、功業を成就せしめずと。共に二對の金言として見るべし。

「注意すべきは一錢、二錢なり、壹圓、二圓は彼れ自から注意すべし」とは、米國費府の富豪ステヘン、ゲラーの名言にして、其巨富を致したるも、此邊を注意せしが爲めなりといへり。然るに我國に於ては、兎角小事を忽にして差支あしどの風教世に行きはれ、學者先生の口より小節に拘泥せずとか、「大功は細謹と顧みず」とか、以ての外



の言葉を聞くより、日本人の氣風は、小事を忽にしがちあるが如し。殊に今の書生、學者の中には、最も其風の行ふはるゝ様子にして、磊落粗豪を却つて自家の面目とするものあきにあらず。去りあがら、今後の日本は去る濶達の世の中にあらず。萬事萬端緻密を要するの時世あれば、深く細事にも注意すると甚はだ肝要と知るべし。些事あればとて、之を度外に措かず、綿密に之に處して、小サある穴の隅迄も行き届くを心掛くれと、大事は自づからに成るを得べし。細些を注意外におくの風を打破して、周密ある心事の日本人とあらんと、余の望む所あり。

紐育のヒール、テイ、バルナムが「致富論」の著者フリードレイに書き送りたる商業家の心得十ヶ條は、後進の士人を益すると少あからざるを覺ゆれば、此に其要を掲ぐ。

第一。汝の氣質、嗜好に適せる事業を擇ぶべし。……余は商人としては、功を成すと能はざりし。余は純然たる投機的の氣質を有せしが故に、とりきまりたる給料に満足するを得ざりしあり。去れ共、他人は全く余と反對あるものありしあり。故に己れに最も適せる職業を得るとに注意すべきあり。

此一ヶ條は固より陳套の言かれ共、陳套ありと思はるゝ迄に、此理を知る人に於ても、事の實地に當れを、其旨を行ふと誤まるものあり。殊に少壯の時にあつては、世の中の風波に漂はされ易さが故に、當時の社會が政論流行の世の中あるときは、漫に政治家とあらんとし、商を尙ふの説あるときは、徒に商を望まんとし、自己が天賦の氣質、嗜好に適、不適を問はざるに至らんとす。余は日本の後來は、商の世の中あるが故、後進の士人は此に着眼して、當世に處



するを誤まるべからずと説くものありと雖も、其心より眞に商を好まざるものをして、此に従はしむるは、余の本意にあらざるあり。甲は文學の嗜みあるべし。乙は醫師とあつて仁術を世に施さんと望むなるべし。丙は政堂に立つて政を議するを望むあるべし。人の品により其好む所は各々同じからずして、「好きこそ物の上手ある次第」あれば、業を擇ぶには此點と第一に考へざるべからず。其人の理想より考へ見たらば、今後の日本は商賣殖産の世の中にして、殊に學者の歸商は、相方にとり最も必要のとあれを、余は商とあるべし、筆を投じて算盤を買ふの時ありとて、頻りに商を望むと雖も、其理想のみ之を許すも、其天賦の資性が之に向かざるときは、後に悔るの不幸のありがちなるを思はざるべからず。第五章にも記るしおきたるが如く、學者の樂と商人の樂とは、其趣を異にするが故に、其

天性より商の樂を樂とするものにあらざれば、其道に従事して、其妙を極むるを望むべからず。東京の或る質商の一子にして、天資商賣を好まず、遊藝の嗜み深くして、遂に清元の名人とあり、今は……太夫とて藝名を一世に立つる者あり。藝人の事は望まじき職業にはあらざるも、其好む所に就けば、即ち其妙に達するの例として見るべし。故に今の少壯士人が世に歸商を勸むるの説あるを聞いて、兎角の考へもあく、漫に歸商の志を決するは智者の事にあらず。其天資に於ても商人の樂しみを樂しみとし、其理想に於ても商人の業を望むといふ人こそ、商に歸して、其前途の多望あるを期しうべきのみ。然らざるものは、其好む所に止まるに如かざるべきか。世に書生歸商の説あるは余の甚はだ喜ぶ所あれ共、もしも其論の爲めに誤まられ、其天資に適はざる事に従がつて、後に悔をあすとある



を想像すれば、氣の毒の至りあるが故、筆の序でに、いさゝか一言を置くのみ。

第二。 汝の口外せし言葉と破るとおかれ。……事を約すれば最も速やかに之を仕遂げよ。然らずば其約束をなさいるを可しとす。自己が約束したる如く、何事も常に其とりきめたる時に於て、之を爲すとの評判より、商賣上に於て大切のものはあらず。此規に違はざるものは、其知人をして其遊資を貸さしむべく、其朋友をして多くの信任をおかしむべし。

第三。 汝の爲す事は何事にても、汝の全力と注ぐべし。……少しにても爲すの直値ある事は、何事にても、能く之を爲すの直値あるものありとの古諺にも明あるが如く、苟くも一事を成さんとせば滿腔の熱氣を以て滿心の事業を爲すべきあり。滿

心の業は以て巨富を致すに足るも、半心の勞は人をして貧に止まらしむるのみ。思ふに功名の心、氣力、勤勉、忍耐の數の者は、事功を成すに欠くべからざるの要素あり。

第四。 酒を用ゆるを謹まざるべからず。……友と酒杯を取交はしつゝある中に、幾度か好機會をして行かしめしむ。而して其好機會は去つて復た還らざるにあらずや。飲物として酒を用ゆるの結果は支那人が鴉片を喫するが如く、其心志を錯亂せしめ、随がつて人の成功を害するもまた鴉片の毒と讓らざるあり。

第五。 望は多大あるべし、架空に過ぐべからず。……架空の望を屬し過ぐるが爲めに、世間幾多の人は常に貧困に苦しめり。何の企圖も、其輩の眼には、成功するが如くに見ゆるが故に、常に一業より他業に轉つて、終生得る所なくして過ぐ。架



空の望を屬するの罪あり。

第六。 汝の力を散せしむるなかれ。……………一種の業のみに従

事せよ。其成功を見る迄は、若くは之を放棄すべしと決心する  
迄は、信實に其業に務めよ。見すや、泰山の雷、能く石を穿ち、

彈極の綆、能く幹を斷つ。水、石の鑽をらす、索、木の鋸を  
らざるも、之を續くるの結果は尙ほ且つ然り。一事に注意を集  
めて、他に向くるとあくば、其人の心は、常に價值ある改良と  
思ひ付くにひきかへ、一時に種々の業に、其頭腦を用ゆるの結  
果は、注意多端にして、また心に改良を思ひ付く的機會なきあ  
り。一時に過多の事業に従事するが爲めに、幾多の幸運は其人  
の指間よりスベリ落ちたり。思はざるべからず。

第七。 適任の人を使用せよ。……………十八十色の世の中に在つ

ては、其適する所を視て、之を使ふべきは、申す迄もなきこと  
にして、正直者は金錢の番人たるべく、才辨家は外部附合ひの外  
交掛りたるべき等、其人の品によりて其用を異にするあり。

第八。 汝の商賣を廣告せよ。……………世人の愛顧を望むの商賣  
たれば、何商賣にても、之を充分に廣告せよ。廣告の利益ある  
は、今更申す迄もなきとあがら、試るみに彼の農夫と見すや。  
種子を植へて、一睡しつゝある中に其穀物は成長しつゝあると  
同様、廣告をあして眠り、又は食し、又は或る顧客と談話しつ  
ゝある中に、汝の廣告は數千人、數萬人の目に讀まれて、思ひ  
がけなき所より、注文を受くべし。

曾つて米國の一新聞に、「廣告は利あり」との文字を置き、左の如く其  
字々を分析して、之を結ぶに廣告をだに寄せば成功を來すとの一句



- A — stands for Action, which makes business move,  
 D — for the Dash, which ne'er gets in a groove;  
 V — stands for Vim, which e'er leads to success,  
 E — for the Energy hustlers posses;  
 R — stands for Reason, to which good sense yields.  
 T — stands, for Type which the world's scepter wields;  
 I — stands for Industry, handmaid of thrift,  
 S — for the Sales which don't come as a gift;  
 I — stands for Indolence, man's greatest curse,  
 N — for the Nothing in Lagybones' purse;  
 G — stands for Gold, which you all want to get.  
  
 P — stands for Patience, which bids you not to fret,  
 A — for Advise that you keep out of debt;  
 Y — stands for You, sir, whom thus I advise,  
 S — for Success if you but advertise.

を以てしたるを見るに、如何にも趣向の面白きのみか、其一句く  
 は商人の生を送るもの、箴規ともあれば、其儘を此に記るして、廣  
 告の功利を説くに代へんとす。



筆の序に、新聞廣告の商賣に必要ある一著例を挿まんに、巴里の銀行者にして、プチット新聞の創立者たるミローは、新聞廣告の熱心家を以て、人に知られし人ありしが、一日府下の重立ちたる諸新聞の社主と招きて、宴會を開ける其席上に於て、談偶々新聞廣告の事に及べるに、得意に其功德を説き、新聞廣告をあすと充分あれば、價値あき品物も、澤山に賣弘むるを得べしといへり。時にラ、プレツス社のシルマンは、其利を説くの餘りに大なる旨を述べしに、ミローは、今若し府下の各新聞に、一ペーシの紙面を填する丈けの廣告をあして、仰々しく其機能を述立てあば、一週の間にはキャベツの種子金十萬法(フラン)を賣盡すと難からずとて、シルマンと賭と試ろみんとを挑めり。シルマンは之に應じて、「若し壹週間の後に、足下の云ふ如き結果を得ば、余は我新聞の一ペーシを無代價にて貸與ふべし」と述たるに、列席せる各社主も、皆之に一同して、共に其新聞紙面を無代價にて貸すべきを約せり。然るに壹週間の終りに及び、右の社主達は、件の廣告熱心家を訪ふて、右の賣上高を問へるに、ミローは誇り顔に賣上帳を出して、其賣上金額の氏の預言せるよりも、幾んど二倍の多きに達せるを示せりといふ。新聞廣告の利益ある一例として見るべし。

第九。奢侈を避くべし。而して常に汝の收額よりも大に扣へ、目に暮らすべし。

此趣意に付きては、前だつ第四章に詳記せしが故に、只た一の尙ほ言ひおきたき事を記るさんに、「易く來るものは易く去る」といへるとあり。幾多の少壯士人、其生活の初途に於て、少しく多錢を益して身の自由を覺ゆれば、直ちに奢侈の道に躩み入つて、多錢を散じ、其



結果は、忽ちにして、其収入を浪費して、徒に外見を飾る浮事の爲めに、遂には其身の志業を誤まるものあり。思ふに年少の人々が生活の初途に於て、少しく金儲ケの多きと僥倖するあるときは、忽ちに心憊りして、斯くの如くあらば、可なりとて、早くも娉奢の端を開くと雖も、來り易きは去り易くして、當初一時の榮華は夢死夢消して、今は始めの割合に、錢を益せざるに、散財を重ねるの餘毒は、遺りて目前の借金となり、過侈に慣れし弱性は、容易に矯め難くして、財を流用しがちにあり、事の果は、借金に借金を加へて、遂に絶望の境に立つものあり。蓋し當初一時の浮榮に心誇りして、後を謹しまざるの罪あり。人の分として、生計の度を進むは、喜ぶべきとされ共、一時に飛び上るべからず。蝸牛が竿を登るが如くに、一歩と進まば、再び降下するの憂はあらず。世間幾多の輕俊

子が、一時速成の僞紳士を氣取るが爲めに、却つて立身の歩を弱はむるを見ては、我言なきを得ざるなり。

第十。他に依屬するおかれ。……汝の成功は汝が自からの働らきに屬すあり。友の力に依るおく、人は總て其身自からの好運の建設者たるべきと知れ。

汝のパンは汝が額に浮べし汗にて買ふべし。之を身の獨立といふ。日本に於ては、身の獨立を重んずるの氣風、世に盛んあらざるは、國の繁昌の歩を遅する原因の一あり。早く此獨立の氣象が、日本の社會にしみわたり、小兒の時よりして、額に汗して已が身を温たむとの氣慨勃々掩ふべからざるに至るの時を來して、國運の繁昌を喜びたきとあり。

善良ある妻は、滔々たる世波の間を切りぬけて、共に前に進まんと



するの眞誠なる伴侶たりとせば、適當の年柄に至つて妻を迎ふるは、身の榮達の爲めに大切のと、知るべし。……眞の令嬢とこそ求むべし。彼は通例意氣にはあらず、富めるにはあらずとはいへ、其心は。大ひあるあり、純白あるなり、慇懃にして柔和あるあり。汝もし彼が愛を得ば、汝が二千金は、即ち百万金あり。彼は簡素ある衣服を着して、棄つべき時に之を去るあり。諸々の品々を潔麗にして、之を汝が座敷に保ち、汝が外より歸り來るを見れば、愛らしき厚遇を以て汝を待しつゝ、汝をして家を愛するの情を持たしめ、家内團樂の樂は、人間至極の樂ありとのとを知らしむべし。戶外幾多の苦は此樂の爲めに忍ぶべく、其内助の力は、汝をして翼をひろげて、業を成さしむべし。行けよ、眞誠の婦女を求めて之を妻とせよ。汝が口にする、其巻煙草を投せよ。汝を狂にする其酒を棄てよ。以て

汝が精神を敏くせよ。以て敏き道を以て、汝が妻を求めよ。大事業を成したりし人が或る人に語りけるとあり。曰く  
 余が十八歳なりけるときに、「決して何物をも失はざるべし、又決して何事をも忘れざるべし」との二事を學びたりしが、之が爲めに、余が一生涯を非常に利したりしあり。余が此二事を學びたりし次第を語らんに、一人の老へる法律家か、或る大切なる書類を余に與へて、大切に取扱ひ、決して失ふまじき旨を告げり。時に若かりし余は問へり。「去りながら假りに之れを失ふとせば、其時は如何にすべきや」老人「汝は之れを失ふてはならぬあり」少年「失ふとは申さぬあり。去りながら假りに失ふとの生るべきものとせば」老年「去りながら余は言はんとす、それを失ふとを起さしめてはあらぬあり。余は此様ある事を出來べしと見て、その用意は致さぬあり。」



汝はそれを失ふてはならぬあり……此事は一少年ありし我をして、一の新思慮を浮べしめしあり。我もし一事を成すべく決意せば、余はそれを能しうべきを悟れり。余は如何なる出来事に會ふも、何物も失せざるべしとの用意をさせり。余は「忘却す」といふとも等しく同一理あるべきを知れり。重要ある事柄の記憶すべきものありし時は、心に刻み付けて、それをしてうに止まらしめり。人は爲すべきを爲さざりし時は、「余はそれを忘れたり」とさへいへば、其謝を致しうべしと思へども、其謝は其罪を償ふに足らず。忘るゝは既に心掛の足らぬが爲めなり。意に留めおく事を忘るゝとはあらぬあり。「忘却は其心の怠慢なる、不注意ある習慣の結果なり。」

思ふに人がかくすべしと思ふて、其思ひの通りにあらざるは、其決

心の堅からざるか爲めなり。其勤勉忍耐の足らざるが爲めあり。右にいふ「必らず失せず、必らず忘れず」の二事のみにあらず、万事かくあさんと堅く心に誓へば、其如くあるを得ざるの理はなきあり。余が前に記るせし諸般の規言を見て、「是れ多を求むるものあり、完を欲するものあり、到底うの如くは行ひがたし」とて、之を其身に行はんとを務めざるは、自棄自暴のみ。自から棄てずして、必らずや其如くを行ふを敢てせよ。必らずや、必らずや、必らずや、必らずや。

余が此小冊子の中に陳べたく思ひたりし事は、此に至りて略ぼ盡さぬ。余が世故に老けず、經驗に富まず、見聞に膽かからざる一少年の身を以て、敢て自から揺らず、此一冊子を握んで、之を世間に投げ出すを憚らざるも、是れ此日本が今の少壯士人に頼む所の多きと知ればあり。少壯士人の志業は日本が未來の興廢を決するものあり。



るを思へばあり。余は經歷家の教を聞き、博聞家の説を聴き、

William Cobbett. 〇 "Advice to Young Men."

James Platt. 〇 "Business."

Edwin T. Freedley. 〇 "How to Make Money."

Geo. Cary Eggleston. 〇 "How to Make a Living."

Experientia. 〇 "The Youth's Business Guide."

James Mason. 〇 "How to Excel in Business."

J. Ewing Ritchie. 〇 "Money-making Men."

Matthew Hale Smith. 〇 "Sunshine and Shadow in New York."

等の數書を周讀して、遂に此一書を筆し、自から思へらく、年少の士人が、商の身を以て、世に處するの道は、是に外あるべからずと。余は其信する所を以て、之を後進の士人に告げんとする者あり。

「事業論」の著者プラット、其論の結章に筆して曰く、「讀者よ、汝が讀みたりし所のものを熟思せよ。著者の何たるを問ふかかれ。著者か教説の精神を了せよ」と。「商賈人」の著者もまた其讀者に向つて、其所論の精神を諒せんことを望むものあり。

此「商賈人」に筆せるマシメの論旨を愛好するの讀者は、一步進んで、静夜、閑ある時、前さに言ふコッベット、フリードレイ、リッチナー等の著書を開いて、熟讀熟慮すべし。蓋し思ひ半に過ぐるとあらん。

讀者或ひは本書の香もあく、色もあく、乾燥零枯せるを責めて、「致富は智謀、奇計にゐるものを、之を論ずる『商賈人』の計謀を語らず、術策と説かざるは、徒に讀者をして倦ましむるのみ」といふものあらば、著者と言はんとす、「富に到るの道は、市場に行く道の如くに明白あり。致富の事は主として二ヶの簡明ある文字に屬す、即ち勤勉、



節約のみ。時を浪費せず金を流用せずして、此兩者を敏く用ゆる  
にあるのみと。余は常を説くものあり、平を語るものあり。神算鬼  
策は他に語るの人あらん。本書の知らざる所あり。

版權登錄

大尾

明治廿一年十一月十五日印刷  
明治廿一年十二月七日出版

定價金三十五錢

著述人

神奈川縣平民 富田源太郎  
横濱黃金町三丁目十五番地

發行人

愛知縣平民 佐藤乙三郎  
東京日本橋區大傳馬町  
二丁目十五番地

印刷人

藏田仙之助  
東京日本橋區元數寄屋町  
四丁目二番地

發賣所

成文堂  
東京日本橋區大傳馬町  
二丁目





佐藤成文堂出版書目

龍溪矢野文雄先生 鶴巢松葉卓爾先生編修  
思軒森田文藏先生刪潤

再版 西俗雜話

洋裝美本全書册  
正價金四十五錢  
郵税金十八錢

本書は報知社の矢野龍溪森田思軒其他諸先生が歐米諸國周遊中其の見聞せる所を細やかに物語らしを松葉先生の編修されし者にして一般の禮儀作法衣服の着方食事の仕方より芝居の模様筋書國會議員選舉の振合酒屋湯屋菓子屋八百屋其他歐米諸國を旅行するには如何せば品好く費少なく行かれ得るや如何にせば西洋人に見下げらる憂ありや等都へて法とすべき事又た年若き男女が花を相贈るの風其花に意味を含まじむるの風正月の代りに教祖誕生の日を祝ふ風等有らゆる歐米諸國の風俗を詳記し外編には彼地禮法の規則をさへ附録したれ

この書は洋行して其の風俗を知るに其の想像あるべく又た洋行する人々には直ちに其の案内書となるべく又た西洋人と交際する人々に其の心得書となるべし殊に此書は現在森田先生に於て文章を刪し矢野先生の詞を經れば平易明百人にも能く讀みやすし尙ほ續編には兩先生自筆の歐米紀行及び其他の珍語を掲ぐ出版後數月を経ずして再版せり其社會に利益ある事推して知るべし

鶴巢松葉卓爾先生校閱  
鶴巢牛山良助編纂

再版 英和西洋落語

西洋裝美本  
正價金拾五錢  
郵税金八錢

歐洲文明國の俗間ニ行ハル、滑稽洒落ヲ集メ且英和對譯ニセシモノナレバ一ハ外國ノ事情ノ一斑ヲ知リ一ハ英學ヲ修ムル者ノ爲ニ快樂中ニ利益ヲ享ケル古今無類ノ珍本ナリ



內藤正史先生序  
西村天因先生跋  
坂本參先生跋  
天筆將軍著

### 新編論理學

演繹法 紙數凡三百三十頁  
郵稅金八十錢  
郵稅金廿五錢

論理ノ學タル哲學ノ一科ニシテ思想ノ方式ヲ論ズ  
ルモノナレバ其說妙遠深微ニシテ極メテ難澁ノヲ  
ノトス故ニ論理書ノ格ニ上ルモノ世既ニ乏シカラ  
ズト雖モ多クハ高尚ニ失シ或ハ錯亂ニ流レ然シテ  
理明ニ義精カ論然貫通スルモノニ至テハ殆ント渺  
シ本書ハ著者大學ニ在テ論修テ餘暇ニエボシ氏論  
理學及ヒレイン氏論理書等其他諸書ヲ參覽シ  
理論ハ適例ニ由リ行文ハ平易ニ從ヒ讀ヲ簡易明瞭  
ト主トシテ之ヲ解説シ且ツ譯字ハ專門諸學士ノ著  
書ヲ始メ凡國語ヲ以テ成レル諸書ヲ對照シ最モ適  
當ナルモノヲ採ビ其釋カナヲサレモノハ更ニ妥當  
ト新譯ヲ採ミテ解シ易クナンテテ求メ猶文學士等  
井先生ノ校閱ヲ經テ之ヲ刊行シタル者ナラバ實ニ  
論理ノ書ニ於テハ隔靴搔癢ノ憾無キ無  
云フヘシ請フ江湖言論ヲ重ズルノ諸君  
購入テ座右ノ寶典ト爲シ給ハンコトナ

內藤正史先生序  
西村天因先生跋  
坂本參先生跋  
天筆將軍著

### 天筆大將軍

洋裝全一冊  
正價金三十錢  
郵稅金十錢

顯レタリ顯レタリ古今未嘗有之更聖天筆大將軍  
レタリ將軍ハ筆鋒霹靂ヲ飛バセ將軍ハ現海巨龍  
進ラズ將軍ハ墨林狂虎ヲ躍ラセ筆鋒ノ向テ天下  
敵ヲク敗廢世界ノ妖鬼浮萍世界惡鬼遠ク跡ヲ  
ノトス時世ノ一番銷ヲ志ス者一讀セズシハ何ノ功  
カ能ク爲スナ得シヤ

### 新記事論說文例

和裝全一冊  
正價金二十五錢

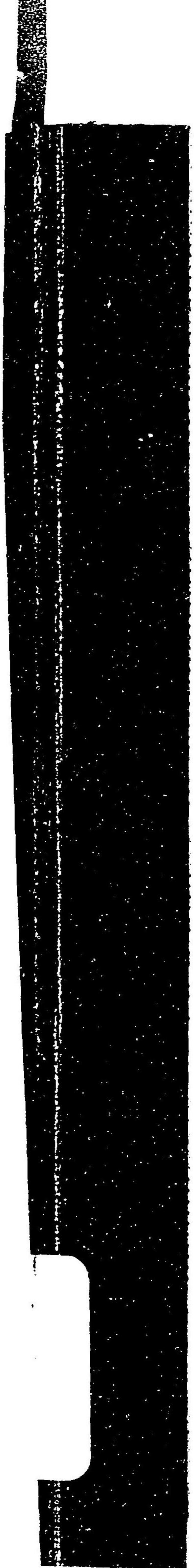
原田新次郎譯

### 西洋裁縫教授書

洋裝全一冊  
正價金四十五錢

附圖共







特29

691

043463-000-0

特29-691

商売人

富田 源太郎/著

M21

BDL-0438

